

大江戸ぴーちくぱーちく

作 島田 悠子

【あらすじ】

ここはお江戸。ネコ吉（30）は今日も元気に売れない瓦版屋をしている。ネコ吉が自主制作している瓦版は、時事ネタ無視で創作ばかりの嘘八百超B級誌。まともな客には見向きもされないが、案外イケると一部で火が付き、ネコ吉はあれよあれよで將軍サマの「おとぎ衆」に大抜擢される。

「おとぎ衆」とは、將軍サマに夜な夜なおもしろい話を聞かせるお役目。これは金になるバイト、と万年金欠のネコ吉が浮足立ったのも束の間、將軍サマこと吉宗（35）は滅多な話では満足しないわがまま放題好き放題の暴れん坊オレ様將軍だった。ネコ吉は吉宗から3つの条件を突きつけられる。

一つ、おもしろい話をする事

（スベったら即打ち首！）

一つ、ホントの話である事

（ウソだったら即打ち首！）

一つ、ハッピーエンドである事

（胸クソ悪いオチだったら即打ち首！）

レパートリーは作り話ばかりのネコ吉に3つの条件を同時にクリアできるネタなんてない。窮地におちいったネコ吉が苦し紛れに口にしたのは、化けて出る家を間違えた女幽霊の話だった。それはつい先日、呑み屋で聞きかじったばかりの江戸の奇妙なうわさ話で……。

よりによってこのネタに吉宗が食いつき、ネコ吉はさらなる窮地におちいる。この事件は現在進行形でオチがない。「次回に続く、こゝろご期待！」ネコ吉は話を切り上げ、ダッシュで帰宅。大至急うわさの真相にリサーチをかけ、得意のウソ八百で身分を偽り事件に介入。ともかくにも「ハッピーエンド」で終わるよう、ネコ吉は女幽霊事件解決に乗り出す。事件をおさめて結果的には人助け、失敗すれば恐怖の打ち首が待っている！

かくして、ネコ吉は江戸市中をかけずりまわって完成させたおとぎを吉宗に披露するのだった。

【登場人物】

ネコ吉 (虎吉)	(30)	(25)	江戸の瓦版屋
飛夏	(20)		御庭番のくのいち
つゆ	(18)		大店の娘
木村 九郎衛門	(24)		貧乏浪人
前野新三郎 (黒崎丈之助)	(37)		女たらしの侍
りん	(16)		盲目の少女
蟲玄庵	(47)		医者
オヤジ	(50)		飲み屋の主人
瓦版を買う客 1、2、3、4			
隣の瓦版屋			
身なりの汚いオヤジ			
髪結屋のオヤジ			
大家の十兵衛			
因縁をつける男 1、2			
花魁の紅雲			
商家のぼんぼん			
呉服屋の手代			
材木屋の若者 1、2			
前野の子供			
山那 り左衛門	(40)		おとぎ衆のひとり
朝霧 之助	(24)		おとぎ衆のひとり
本院蔵 鴫	(36)		おとぎ衆のひとり
徳川 吉宗	(35)		八代目将軍

○十兵衛長屋・路地（夜）

夜霧がけむる真夜中。虫の音。

寝静まったおんぼろ長屋に、カラーン、コローン、カラーン、コローン、と下駄の音が響く。

ぼんやりとした灯りが近づき、路上のコオロギが鳴き止み、逃げる。

痩せ細って青白い女の手元。持っているのは牡丹の花が描かれた灯籠。

足元を照らし、女はゆっくり歩いてくる。やがて、一室の前に立ち止まる女。

乱れた髪、乱れた着物、亡霊のような女、

つゆ（18）。

つゆは、ひた、と戸に手を置き、

つゆ「……うらめしや、新三郎さま。いらっしやるのなら、この戸をお開けください……」

消え入るような細かい声で呼びかける。

○同・九郎衛門の部屋（夜）

暗がりの中、怯える男、木村九郎衛門（24）。

口元を押さえ、布団にくるまっている。

コン、コン、と戸を叩く音。

つゆの声「……新三郎さま？」

九郎衛門は息を殺し、返事をしない。

つゆの声「……新三郎さま……」

静寂が戻り、九郎衛門はふとんから這い出て、外を確かめようと戸に近づく。

そつと戸に顔を近づけ、隙間から外をのぞく九郎衛門。

外には誰もいない。

九郎衛門がほっとすると、突然、血走った女の目玉がのぞき返す。

つゆの声「みつけた！」

九郎衛門「ひええっ！」

腰が抜け、尻もちをつく九郎衛門。

ドンドンドン、ドンドンドン！ 女

が激しく戸を叩く。

つゆの声「新三郎さま！ やっぱりそこにいた！ 新三郎さま！ この戸を開ける、新三郎っ！」

しばらく耳をふさいで怯えていた九郎衛門も、やがて意を決して立ち上がる。勢いよく戸を開ける九郎衛門。

対面する男と女。

そこにいるのは若く美しい娘だが、この世の者ではない雰囲気。雪のように白い肌、血のように赤い唇。真っ黒な瞳を見開いてこちらを見つめている。

九郎衛門「あ、あのっ！」

男は勇気をふりしぼって言う。

九郎衛門「その人なら、先月、引越しましたけどっ！」

つゆ「……」

無言で見つめ合う男女。

虫の音が、りーん、りーん。

○江戸城・外観（夜）

ほぎゃー、と男の悲鳴。

○同・中奥（夜）

ふすまに激突、突き倒して隣室へと転げ

る山那やまなみ左衛門（40）。

吉宗「だから、つまらんのだっ！」

だん、と足を踏み鳴らし、仁王立ちで見

下す徳川吉宗（35）。真っ白の寝間着姿で、

人を威圧するオーラをまとった美男子。

山那「う、上様！ お、恐れながら、この話は、ここからが一段とおもしろく……」

吉宗「ならん！ はじめがつまらん話があとでおもしろくなつたためしなどない！ 山那っ！」

山那「はひっ！」

吉宗「二度と、『むかしむかしあるところに』から始めるんじゃない。虫唾が走る！」

山那「し、しっかと承知いたしましたあ！」

吉宗「最後のチャンスだ。他の話をしてみる」

山那「ほ、他の話といいますが、そろそろ……」

吉宗「ネタ切れとは言えないな？」

山那「は、はいいいえ？」

吉宗「はいか、いいえか、どっちだそれは！」

山那「はいでございますハイ！」

吉宗「ガツデム！」

山那に迫り、乱暴に胸ぐらをつかむ吉宗。

山那「ひえええっ！ お許しを、上様あ！」

吉宗「おもしろい話をしてこのオレを楽しませるのが、貴様らおとぎ衆の役目ではないのか！ 貴様らもだ！ 朝霧！ 本院蔵！」

部屋の他の二辺のふすまも突き破られて

いる。そこにそれぞれ倒れている朝霧あさぎり

ゆきすけ
之助（24）と本院蔵ほんいんぞうとぎ（36）。

朝霧・本院蔵「ひえええ、お許しをっ！」

吉宗「なにがおとぎ衆だ。話のプロだ。そろいもそろって与太話ばかり！ つまらんだっ！」

朝霧「もっ、ももももも！」

本院蔵「申し訳ございませぬ！」

吉宗「打ち首にしてほしいのか！」

ゴージャスな装飾の刀をつかむ吉宗。

山那「めめめ、滅相もございませぬ！」

朝霧「上様の御太刀が汚れてしまいます！」

本院蔵「もったいなき事！」

吉宗「耳が腐る！ 寝つきが悪いわ！ ……ふ。まあよい、気晴らしにストレッチでもするか」

吉宗、刀を両手で持って背伸びの運動。

不安げに視線を交わす山那、朝霧、本院蔵。

山那「ストレッチって、なんだ？」

朝霧「ストレッチは、初耳ですね？」

本院蔵「ストレッチって、血なまぐさい？」

吉宗「おっと。手が滑った」

吉宗、するっと抜刀。山那、朝霧、本院蔵に斬りかかる。

山那「やっぱり、こうなる！」

悲鳴をあげて逃げまどう三人。

吉宗にはお遊びだが、無茶苦茶すぎる。

ネコ吉の声「はてさて、この暴れんぼさん將軍に いじめられてる可哀そうな連中は『おとぎ衆』 っていう側近。ぎっくりいえば將軍の話し相手

だ。昔はいつちよ前に政治に口出ししたり絶大な権力なんか振るったりもしたらしいけど、今となつてはこの通り。上様におもしろい話をするって基本のきに戻った、まあ、いわばおもしろおしゃべりオジサン的なお役目？」

必死の形相で逃げる山那、朝霧、本院蔵。

吉宗は部屋が壊れるのも気にせず暴れる。ネコ吉の声「こう見えても、おとぎ衆っていうと、神羅万象に通じた結構な博学者の集まりなんだけど、この將軍、吉宗ってのが、またおそろしく物知りなヤツで。こんな顔して超超超がつくほどの本の虫。物語なら天地創造のはるか昔の神話から、今いま流行の歌舞伎演目まで、ずらずらずらっと抜け目なくなんでも知ってる食えねえお客。海の向こうにも詳しくて、あつちの言葉だつてペラペラ話す。こんな殿様いままでいたか？ めったな話じゃ納得しねえし、毎度毎度『つまんねえ』ってダメ出しの嵐にこの騒ぎ、さすがのおとぎ衆たちもお手上げだ。もう話すネタも見当たらないし、このままじゃ本気で首だつて飛びかねない。はて、どっかにおもしろい話ができるヤツは転がってないかって、まじで頭抱えてたんだ」

吉宗の刀でロウソクが切れ、炎がついたまま落ちる。

朝霧「いかーん！」

本院蔵「城が燃えるう！」

山那、滑り込みキャッチでロウソクをつかむ。

山那「あづっ！ あつっ！」

吉宗「ナイスキャッチだ」

山那「あつ。そういえば」

山那、なにか思いつく。

○大通り

ネコ吉(虎吉) (30) が瓦版を売っている。

ネコ吉「てなわけで、続きが知りたきゃ持ってきたな！ さあ、押すな押すな、買った買ったあ！」
客1「一枚くれ！」

客2「こつちにも一枚！」

わあわあど押しよせて群がる客たち。

といっても、ネコ吉にはない。ネコ吉

の前はスカスカで、隣の瓦版屋が大盛況。

隣の瓦版屋「わかったわかった、押さないで！

仲良く順番順番で頼むよ！ はいよ、そのき

れいなお嬢さん、毎度ありい！」

ネコ吉、客3に尻で突き飛ばされる。

客3「邪魔だ、どきな！」

ネコ吉「うおっ！」

隣の瓦版屋「ぷーっ、くくく！」

隣の瓦版屋がネコ吉をせせら笑う。

隣の瓦版屋「おーい、ネコ吉、生きてるか？」

ネコ吉「あ、あん？」

隣の瓦版屋、びよいと台から降りてネコ

吉に近づき、ネコ吉の瓦版を一枚取る。

隣の瓦版屋「どれどれ、今日のネタはなんじゃら

ほい？ おい、こいつはたまげた一大事っ！」

ネコ吉の瓦版。大見出しは「竜宮城つい

に発見！ 地図あり」。

隣の瓦版屋「竜宮城、ついに発見！ 地図ありま

す？ 寝言は寝て言え、このすかぼんたん！」

瓦版を丸めて捨てる隣の瓦版屋。

ネコ吉「あつ！ てめえ、大事にしるよ！ 紙代

もバカになんねんだからな、もつたいねえ！」

隣の瓦版屋「よくまあ、毎度毎度、嘘八百こきや

がつてネタがつきねえもんだ。てめえは夢物語

の湧水か！ 大嘘つきのこんこんちきが！」

ネコ吉「おー、頭っから決めつけてくれんなよ！」

隣の瓦版屋「こんなゴミくず、買うヤツいるか？」

ネコ吉「いるんだなあ、それが！」

隣の瓦版屋「嘘つけ、一枚も売れてねえだろが、

バレバレの見栄はってどうする！ 商売ま隣

だろうが、又ケサク！」

ネコ吉「うっせえ、一部界限じゃバカ受けだわ、

ボケナス！」

隣の瓦版屋「どこの一部界限だよ、読者連れて来

い！ てめえの瓦版はな、二流、三流、いーや、

いろはで言ったら、い、ろ、は、に、ほ、へ、

と、ちりぬるを、我が世誰ぞ常ならん、有為の

奥山今日越えて、浅き夢見じ酔いもせ、ずー、の『ず』だ！ ず！」

ネコ吉「まどろっこしんだよ、悪口が！ ひとことどんケツって言え！」

隣の瓦版屋「いっけねえ、知識があふれ出しちまったよ、どっかのアホとはここの出来が違うもんでな！」

隣の瓦版屋、自分のこめかみを指で叩く。

隣の瓦版屋「瓦版ってのは賢いヤツが書くもんだ、見様見真似の素人はおとなしくすっこんでな！ うちの隣で商売すんな、ず！」

ネコ吉「てめえの方からすり寄って来んだろ！」
客4「ねえ、ちよつと、ひとつちようだい！」

隣の瓦版屋「あいよ、毎度！」

隣の瓦版屋が次々と売りさばくのを横目に、ネコ吉は捨てられた瓦版を拾う。

くしゃくしゃに丸められた紙を広げる。

ネコ吉「けっこうおもしろい話だぜ？」

身なりの汚いオヤジが来る。

身なりの汚いオヤジ「ひ、一つもらえるかな！」

ネコ吉「ん？ ……オレっ？」

身なりの汚いオヤジ「早くちようだい！」

ネコ吉はうれしそうに拾ったくしゃくしゃの瓦版をさしだす。

ネコ吉「はいよ、毎度！」

身なりの汚いオヤジ「バカ、ごわごわしたのを売るな！ そっちのすべすべをくれ！」

ネコ吉「あ、そっか。ごめんね。はいよ」

身なりの汚いオヤジは小銭を払って瓦版をもち取ると、変な走り方で茂みの方へ。

ネコ吉「……なんだ、あの走り方？」

隣の瓦版屋「クソでも我慢してんだろ」

ネコ吉「え？ ええっ！」

隣の瓦版屋「てめえの瓦版にも使い道があったらしいな！ ぷーっ、くくく！」

ネコ吉「おい！ ケツ拭く前に読めよ！」

隣の瓦版屋「あれじゃ、んな余裕ねえだろ！」

隣の瓦版屋が笑う。

ネコ吉「……ったく」

○なじみの呑み屋・中（夜）

カウンターで店のオヤジ（50）が笑う。

オヤジ「そりゃとんだ人助けだったな、ネコ吉！」

ネコ吉「こっちは売れりゃ文句ねえけどさ」

カウンターに小銭を広げて今日の売り上げを数えているネコ吉。

オヤジ「で、今日は何枚売れた？」

ネコ吉「ほほほ、結構いったぜ、ビビるなよ」

オヤジ「おお。珍しいこともあったもんだ」

ネコ吉「まあ、ざっと、こんなもんだな」

ネコ吉、格好つけて指三本立てて見せる。

オヤジ「いつてそれかよ！ てめえもいい加減、

隣のヤツみてえに火事だ殺しだ強盗だつて、世

間ウケする筋で書きゃいいのによ」

ネコ吉「やだよ。人の不幸はネタにしねえ。それ

より、オヤジ、酒だ、酒」

オヤジ「注文すんなら金払え」

ネコ吉「おい、オレのどこに金があんだよ？」

オヤジ「そこになけなしあるじゃねえか」

ネコ吉「だーめ、これは」

ネコ吉、小銭を集めて懐にしまう。

ネコ吉「オレはついで呑むつて決めてんだ」

オヤジ「帰れバカ」

ネコ吉「酒くれよ、酒！ お客様は神様だろ？」

オヤジ「払わねえヤツは客じゃねえ！」

ネコ吉「ケチ！」

オヤジ「おお、てめえが言うか。びた一文払わね

えくせに宵越しの金もねえつて、どこで金使っ

てんだ。銭溶かして茶釜でも作つてんのか」

ネコ吉「んはは、それウケる。酒」

オヤジ「だから払え、バカ」

ネコ吉「酒え、酒え、ただ酒のませろお！」

オヤジ「うっせえ！ ガキか、てめえは！」

ネコ吉の前に、どん、と杯を置く山那。

山那「では、私がおごろうか！」

ネコ吉「……へ？」

庶民的な侍の格好に扮した山那、朝霧、

本院蔵がいる。

ネコ吉「ど、どちらさま？」

杯に酒を注ぐ山那。

山那「まあ、遠慮するな。呑め！」

ネコ吉「あれ、やば、お知り合い、ですっけ？」

山那「違うが、細かいことは気にするな！ 袖すり合うも他生の縁、この出会いに感謝だ。今宵はともに酔おうじゃないか！ な？」

ネコ吉「で、でも」

山那「いいから黙って呑んでおくれよ！」

ネコ吉、困惑しつつも、

ネコ吉「……じゃ。すみません、ひとつ、お言葉に甘えまして」

杯の酒を一気にあおる。

ネコ吉「ぱあーっ！」

山那「うまいか！」

ネコ吉「命の水だぜ！」

山那「もつと呑め！ 酒も喜んでるぞ！」

山那、もう一杯注ぎながら。

山那「オヤジ！ 酒をあるだけ持ってこい！」

杯の酒をあおるネコ吉。

ネコ吉「ぱあーっ！ 天の恵みだぜ！」

× × ×

テーブル席で酔っぱらって爆笑しているネコ吉、山那、朝霧、本院蔵。肩を組んですっかり打ち解けている。

ネコ吉「オヤジい、酒え！ もつとお！」

オヤジ「もう酒はねえ！ あとは水かめんつゆだ！」

ネコ吉「だっはっは、めんつゆだって！」

山那「めんつゆくれ！ めんつゆーっ！」

ネコ吉「めんつゆくれーっ！」

朝霧「それで、そのガキはどうなったんだ？」

本院蔵「盗賊に一泡吹かせてやったのか？」

ネコ吉「もつちろん！ 貰うもん貰ってまんまと

逃げちまったさ！ 朝起きて、もう、みんなびっくりよ！ 開いた口がふさがんねえ！ 壺の中や金銀財宝がたんまりあるはずが、そこにあっただのは……、ふるっふるんの、つるっつるんの！」

山那「ぎゃーっ、はっはっは！ やめるやめろ！」

腹を抱えて爆笑する山那、朝霧、本院蔵。

ネコ吉「ぷりっぷりんの、ちゆるっちゆるんの！」

山那「よせーっ、臓の腑がねじれる！」

朝霧「バカだ、絶対、バカだーっ！」

ネコ吉「ばやんっばやんの、にゅりっにゅりんの」

本院蔵「だめ、だめ、もう、息できないっ！」

オヤジ「おらよ！ めんつゆ！」

オヤジ、ごん、とめんつゆを鍋ごと置く。

ネコ吉・山那・朝霧・本院蔵「めんつゆーっ！」

四人の爆笑が止まらない。

オヤジ、やれやれとあきれて去る。

山那、笑い疲れながら、朝霧と本院蔵に視線を送る。

笑い疲れながら、うなづく朝霧と本院蔵。

山那「なあ。ときに、ネコ吉」

ネコ吉「あいよ？」

山那「貧乏しているのだな？」

ネコ吉「おうよ！ 赤貧まじイモ洗いよ！」

山那「お前のウワサは以前より聞いていた。市中に珍奇な瓦版を書くヤツがいると。毎回しようもない話ばかりだが、それが一周まわってクセになる。一部界限に熱烈な愛読者がいるとな」

ネコ吉「お、おお？ いんの？ まじで？」

山那「一度、話してみたいと思ってたのだ」

ネコ吉「やだやだ、なんか、照れる」

山那「そして、今、確信した。我々が探していたのは……、お前だ！ 間違いない、ネコ吉っ！」

ネコ吉「え？ なに？ なに？」

小声になる山那。

山那「実は、小銭を稼げるいい仕事があるのだ。なに、楽しんで稼げる簡単な仕事だ。ただ」

山那、いっそう小声になり、

山那「このことは一切、他言無用にしてほしい」

ネコ吉から笑顔が消える。

山那「どうだ、興味あるだろ？ ネコ吉」

ネコ吉は残りの酒を一気におおる。

ネコ吉「楽しかったよ。ごちそうさん」

席を立つネコ吉。

山那「え？」

ネコ吉「悪いな。金は欲しいけど、やばい話にやのらねえ主義。聞かなかったことにしてくれ」

ネコ吉、店を出ていく。

あ然と見送る山那、朝霧、本院蔵。

○同・外・店の前（夜）

店から飛び出す山那。

山那「いやいやいや、違う違う違う、待て待て待て、最後まで聞け、ネコ吉！」

山那、前を歩くネコ吉につかみかかる。

ネコ吉「うわっ、なんだ！」

朝霧と本院蔵も出てくる。

ネコ吉、すがりつく山那を引きずる。

ネコ吉「はなせ！ あんた、しつこいな！」

山那「誤解だ、やばくない、怪しい話じゃないんだ！ そういうんじゃない！ この仕事は、さるお方におもしろい話をしてほしい、それだけだ！ ちよつと行って、ばばっとおしやべりするだけで、十両、礼は十両出す！」

山那をひきずっていたネコ吉がバツと振り向く。

ネコ吉「十両？」

山那「そう、十両だ」

ネコ吉「どこのバカが、たかがおしやべりにそんな大金出すんだ！ やっぱ、まともじゃねえ！ オレはそういうとこ潔癖な男だぞ、裏の仕事はしねえ！ 行かねえ、オレは行かねえぞ！」

と言いつつ、顔はにやけるネコ吉。

山那「朝霧！ 本院蔵！」

朝霧・本院蔵「うおーっ！」

ネコ吉に襲いかかる山那、朝霧、本院蔵。

ネコ吉「よせ！ オレは絶対、行かねえぞーっ！」

○江戸城・中奥（夜）

どん、と太鼓の音。

腕組みして見下している吉宗。

ネコ吉「あ、あ、あ……」

ゴージャスな一室。白い寝間着姿の吉宗を前に、ネコ吉は絶句。

ネコ吉の後ろに山那、朝霧、本院蔵が控えている。

吉宗「誰だ。こいつは」

吉宗のオーラがスゴイ。

山那「かくかくしかじかにて、おもしろい話ができる者を連れて参りました。今宵はこの者におとぎをさせてはいかがでございましょうか、上様！」

ネコ吉「うっ！ うえ、うえさっ！」

山那、ネコ吉の口を押える。

山那「上様がよいと言うまで声を出すな」

ネコ吉、カクカクとうなずき、黙る。

山那「いかがでございましょう」

吉宗「貴様……。勝手なことを！」

山那「まつ、万が一、万まんが一、この者のおとぎがお気に召されませんでしたら、この者、打ち首にしてくださいさっても結構でございます！

この者もその覚悟でここにおりますゆえ！」

ネコ吉「でえええええええーっ！」

朝霧と本院蔵がネコ吉の口を押える。

朝霧「大丈夫！」

本院蔵「自信をもつて！」

もごもごと反論するネコ吉。

山那「この者は、ネコ吉と申します城下の瓦版屋、なかなか口の立つ男でございます。ぜひにお試しを！」

吉宗「……ふん。いいだろう」

一礼してひと続きの隣室に下がる山那、

朝霧、本院蔵。

下がり際、三人は小声でネコ吉に言う。

山那「お前ならできる！」

朝霧「さっきの感じで！」

本院蔵「がんば！」

ネコ吉がとり残される。

ネコ吉に面と向かい、吉宗が座る。

吉宗とネコ吉。

気まぜい沈黙が流れる。

吉宗「死にたいのか！」

ネコ吉「ひゃっ！」

吉宗「さっさと話せ！」

ネコ吉「はい！ あの、えっと。……あるところに、一人の少年がいました。父母はなく、兄弟もない。身寄りには木こりをしている祖父ひとり。少年は祖父を手伝い、貧しいながらも幸せに暮

らしてしまいました。ところが、ある日」

吉宗「次！」

ハッとする山那。朝霧、本院蔵。

ネコ吉「え？」

吉宗「聞こえなかったか、次だ」

山那、朝霧、本院蔵、小声で。

山那「くっ、早い！」

朝霧「秒殺か！」

本院蔵「まさかこの話も！」

ネコ吉「あ、あの。まだ始まったばかりか……」

吉宗「ふるっふるの、つるんつるん、であろう？」

ネコ吉、あんぐり。

山那「なんとという不覚！」

朝霧「知ってたか！」

本院蔵「上様に死角なし！」

吉宗「十万冊」

ネコ吉「じゅ、ジュウマンサツ？」

吉宗「この城には將軍専用の文庫がある。日本全国、津々浦々、海外からも、本という本は名作も駄作もすべからく蒐集されている。その数は十万冊をくだらない。そしてなお、増え続けている。そこには神羅万象が書きつけてある。人の上に立つ者が学ぶべき世界のことわりがな。目を通していないと思うか？ この吉宗が」

ネコ吉は絶句。

吉宗「その話ならもう知っている。そうでなくとも出だしを聞けばたいがい話のオチは読める。物語の基本構造はどれも似たようなものだ。どうした、次の話をしろ、ネコ吉」

ネコ吉「は、はい。えーと……。あ。とある老舗の呉服屋にたいそう美しい一人娘がいました。名は」

吉宗「おきく。まり。さと。るりもあつたか？」

ネコ吉、あんぐり。

吉宗「どの話だ」

ネコ吉「……おきく、です」

吉宗「次！」

ネコ吉「遠く遠く、氷に閉ざされた北の森に人の言葉を話す白い鹿がいた」

吉宗「ふむ」

ネコ吉「ある日、獵師の男が」

吉宗「正体を見破られた妻が森に帰り、悲し気な鳴き声だけが聞こえてくるというオチと、子をもうけたが病気になり、妻が自らの心の臓を妙薬として差し出し命を落とすという二つのオチがある。前者は浄瑠璃、後者は最近の芝居だったか。もとは熟練の獵師と巨大な白鹿が延々一騎打ちをするだけのさもない伝説の類だ」

ネコ吉、あんぐり。

ネコ吉「……勉強になりました」

吉宗「次！」

ネコ吉、自分の頬を叩く。

ネコ吉「ええと！」

山那「がんばれ、ネコ吉！」

朝霧・本院蔵「がんばれっ！」

○なじみの呑み屋・外・店の前（夜）

つうーつうーと羽音をさせて飛ぶ蚊。

パチン、と耳元を叩くオヤジ。

オヤジは店ののれんをしまうところ。

オヤジ「つたく、うっせえ蚊だ！」

手のひらを見てにやりとするオヤジ。

オヤジ「人になうと思っただか、ぬははははっ！」

○元の江戸城・中奥（夜）

ネコ吉「ちくししょう、こんにやろうめ！ いざ鎌

倉！ いざいざいざ！ いざ、って十回、言っ

てください！」

吉宗「ひじ！」

ネコ吉「てやんでばろちくしよーっ！」

畳に両手をつくネコ吉。

山那「上様はひっかからない！」

朝霧「まずい、上様が扇子をパンパンやってる！」

吉宗、扇子を手に打ちつけている。

本院蔵「もうだめだ、万策尽きた！ 限界だ！」

山那「あきらめるな、がんばってくれ、ネコ吉！」

ハッとして顔をあげるネコ吉。

ネコ吉「上様、竜宮城への行き方はご存知で？」

吉宗「竜宮城？ 知らないが」

ネコ吉、ぱあっと表情が明るくなって、

ネコ吉「ですよね！ オレが思うに！」

吉宗「なるほど！ 話すネタには事欠かないようだ！」

話の腰を折られて戸惑うネコ吉。

吉宗「しかしだ、星の数ほどある話のネタから、どれでもいいと言われると逆に話しにくいのではないか？ ネコ吉」

ネコ吉「それは、まあ、そうかもしれませんが、でも、こっからがオレの本領発揮！」

吉宗「瓦版屋といったな！ 少しは話しやすいよう、条件を出してやろう。このオレが聞きたい話は……」

吉宗、指を一本たてて。

吉宗「ひとつ。おもしろく！」

ネコ吉「おもしろく」

吉宗、指を二本にして。

吉宗「ふたつ。ホントにあった！」

ネコ吉「ホントにあ、えっ？」

吉宗、指を三本にして。

吉宗「みつつ。ハッピーエンドの話だ！」

ネコ吉「は、はっぴーえんど？」

吉宗「幸福な結末、という意味だ。バッドエンドは耳が裂けても聞きたくない」

ネコ吉「ばっ？」

吉宗「ハッピーエンドの逆、胸くそ悪いオチのことだ。話がバッドエンドになれば、お前もバッドエンドになる。わかりやすかろう。復唱！」
ネコ吉「お、おもしろくて、ホントにあった、ハッピーエンドの話い？」

慌てる山那、朝霧、本院蔵。

山那「こ、これは……、まずい！ 『おもしろい』は現時点で手詰まり！」

朝霧「『ホントにあった』はネコ吉には無縁！」
本院蔵「その上、『ハッピーエンド』となれば！」
山那「縛りがきつすぎる！」

吉宗「どうした、瓦版屋ならば掃いて捨てるほど思い当たるだろう？」

ネコ吉の顔をのぞき込む吉宗。

吉宗「まさか、ないとは言えないか？」

青ざめるネコ吉、口をぱくぱく。

吉宗「聞こえん」

ネコ吉、パクパク。

吉宗「なに？ 打、ち、首、に、して、くれ？」

アテレコする吉宗。

ネコ吉、慌てて手を振るも口はパクパク。

吉宗「どうした。何か話してみろ」

ネコ吉「……ううう、あああ、あああーっ！」

ネコ吉、頭をかきむしり、うつむく。

吉宗「終わりか？」

ネコ吉は黙ったまま。

吉宗「……つまらん」

立ち上がるうとする吉宗。

ネコ吉「……江戸のはずれ、ボロ長屋」

ネコ吉、うつむいたまま静かに話し出す。

ネコ吉「草木も眠る丑三つ時。生ぬるい風が吹き抜ける。からーん、ころーん、どこからともなく下駄の音が響く」

ぴくりと眉を動かす吉宗。

ネコ吉「ぼんやりと照らされた女の足元。ふわふわと揺れる灯籠の明かり。牡丹の花が浮かび上がる」

吉宗「牡丹灯籠か」

ネコ吉、顔をあげる。

ネコ吉「うらめしや、新三郎さま。いらっしやるのなら、この戸を開けてくださいまし……」

ネコ吉の迫真の演技にのまれ、黙って聞きいる山那、朝霧、本院蔵。

ネコ吉「しかし、男は戸を開けない。女は男の部屋の前。青白くやせた手で戸を叩く。トン、トン、トン。新三郎さま、私をお忘れでございませうか、新三郎さま。ああ、こんなにもお慕い申しあげておりますのに、うらめしや……。開けろっ！ 新三郎っ！」

激するのに合わせて畳を叩くネコ吉。

飛び上がる山那、朝霧、本院蔵。

ネコ吉「中の男は怯え震えていた！ 戸を開ければこの世のものではない女に何をされることか！ 毎晩毎晩、女は男を訪ねてくる！ ドンドン、ドンドン、ドンドン、女が戸を叩く！ やめてくれ、もうやめてくれ、いい加減に！ つ

いに男は立ち上がる！ 男は戸を開け、女に言った！ 『やい、幽霊！ その新三郎ならひと月前に引越した、出る家を間違えちゃあいませんか？』ってね」

最後はおちやらけるネコ吉。

黙っている山那、朝霧、本院蔵。

ネコ吉「ちゃんちゃん」

山那「ぶっ」

山那、吹き出す。

顔を見合わせる朝霧、本院蔵。

朝霧「う、上様が、最後まで」

本院蔵「最後までお聞きになられた！」

吉宗、しばしの沈黙。

吉宗「……で？」

ネコ吉「……え？」

吉宗は真顔。

吉宗「でっ？」

かたまる山那、朝霧、本院蔵。

笑いが消えるネコ吉。

ネコ吉「でっ？」

○（回想）なじみの呑み屋・中（夜）

カウンターで話しているオヤジとネコ吉。

ネコ吉「んで？」

オヤジ「んで、って、バカ。そこでオチだろうが。

こいつは今日仕入れたばっかの話でな、こっか

ら先なんか知らねえつうの！」

ネコ吉「そっか、だよな！ あははは。酒」

オヤジ「あははは。払えバカ」

○元の江戸城・中奥（夜）

ネコ吉、ひきつつた笑い。

ネコ吉「ははは、あはははは……」

吉宗「なにがおかしい」

ネコ吉、黙る。

吉宗「で？ その先は」

ネコ吉「さ、先は。ええと、この先は……」

吉宗「で！」

ネコ吉「で、で、ですな……」

山那「でたあー、上様の、で！」

朝霧「オチで落ちてくれない地獄の、え！」
本院蔵「ああ、聞くだけで胃の腑がキリキリと！」

山那「ネコ吉、がんばれ！」

朝霧「がんばれ！」

本院蔵「がんばってくれ！」

ネコ吉、小声で言い返す。

ネコ吉「がんばれがんばれって、それしか言えねえのかよ！」

吉宗「そうか。続きはないのだな。なるほど。…
…つまらんっ！」

ネコ吉「えっ！」

吉宗「山那！」

山那「はっ！」

吉宗「朝霧、本院蔵！」

朝霧・本院蔵「ははっ！」

吉宗「この男の失敗は貴様らの失敗に等しい。四人並べて打ち首だな」

山那・朝霧・本院蔵「ええええええええーっ！」

吉宗「そもそも、おとぎは貴様らの仕事であろう。この者ひとり的人身御供に、己らの無能を棚上げとは、その魂胆、言語道断！ 失望したぞ！」

山那「そ、そんな、そんな、上様あ！」

吉宗「言いたいことがあるば言っておけ、ネコ吉」

ネコ吉、口をパクパク。

吉宗「聞こえん！」

ネコ吉、言葉が出ない、パクパク。

吉宗「どいつもこいつも、つまらんのだっ！」

ネコ吉「次回へ続くっ！」

ネコ吉、吉宗の言葉にかぶせる。

吉宗「…なに？」

ネコ吉「話の続きはまた今度！ どうなる幽霊、どうなる若侍！ 次回こうご期待！ お楽しみにーっ！」

がばっと土下座するネコ吉。

吉宗「ああ？」

山那「あつ、はっ！ 上様！ 気づけばもう、お

やすみの刻限にてございます！」

吉宗「なに？」

山那「すっかり真夜中にございますれば、おとぎも途中ではございますが、今宵はこれにてお仕

舞いに！」

山那、朝霧、本院蔵もがばっと土下座。

山那・朝霧・本院蔵「それでは上様、おとぎのよ
うな夢をつ！」

素早くその場から去ろうとする四人。

吉宗「待て、貴様ら！」

びくっとする四人。

吉宗「ネコ吉！」

恐る恐る振り向くネコ吉。

吉宗「おもしろい。続きを楽しみにしているぞ」

吉宗がダークにほほ笑む。

怯えるネコ吉。

ネコ吉「ひ、ひええええっ！」

○同・三の丸・外（夜）

走って出てくるネコ吉。

息を切らしながら振り返る。

ネコ吉「んだよ！ んだこれ！ ああーっ、ちく
しょう！ やばいことになっちまった！」

頭をかきむしるネコ吉。

ネコ吉「まじか？ まじで、將軍？ あれが？

あの根性ねじ曲がつた憎つたらしい野郎が？」

誰かの舌打ちが聞こえる。

はっとするネコ吉。

あたりを見回すが、誰もいない。

ネコ吉「……空耳かよ。危ねえ、誰かに聞かれた
かと思つた。あの悪趣味な弱いもんいじめ大好
き將軍に聞かれたら命がいくつあっても」

より大きく舌打ちをする音。

ハッとするネコ吉。

周囲を見回すが人はいない。

ネコ吉「あの性悪の」

舌打ちの音。

ネコ吉「腐れ外道」

舌打ちの連続音。

ネコ吉「やっぱ誰かいるな！」

上から飛び降りてくる飛夏ひなつ（20）。

飛夏「それ以上、上様を悪く言ったら殺す！」

ネコ吉、ぎよっとする。

ネコ吉「誰だっ？ てか、どっから降ってきた！」
飛夏「私は飛夏。お前の監視役だ。姿をさらす気はなかったがこうなった以上、仕方ない！」

飛夏、ネコ吉をひっぱたく。

ネコ吉「ぶへっ！」

思わぬ強打にふらつくネコ吉。

飛夏「口には気をつける！ ドブネズミが！」

ネコ吉「く、口って、お嬢さん、あんたの方がやばいって。かわいいお顔が台無しだぜ」

飛夏「先に言っておくが、私をなめるな。私は上様直属の忍、お庭番の者だ！」

ネコ吉「って、くのいち？」

飛夏「この一件、お前が途中で逃げ出そうものなら私が即座に打ち首を代行する。次、上様をのしつたら生爪をはぐ！ わかったか！」

ネコ吉「こわっ！」

飛夏「話は全て聞いていた。あれでうまく逃げたつもりだろうが、付け焼刃もいところだ。お前はあるもしない話の続きをしにここへ戻らねばならない。五日後だ！ それまでに、せいぜい死ぬ準備をしておくことだな！」

ネコ吉「……あの。つかぬことを聞きますが」

飛夏「なんだ」

ネコ吉「謝礼の十両は？」

飛夏「お前の話は完結してない」

ネコ吉「手付金みたいなのは？」

飛夏「知るか！ 私に聞くな！」

ネコ吉「うわーっ！ だまされたーっ！」

飛夏「だ、だましてない！ おい、声が大きい！」

ネコ吉「そんなのずるいだろ！ 巻き込むだけ巻き込んで何もなしかよ！ ずるいーっ！」

飛夏「私に言われても困る！ その辺はあのしゃべり屋どもと話せ！ 静かにしろ、バカ！」

ネコ吉「どうりでうさんくさいと思ったんだよ！

ああ、もう、最悪だあ！」

頭を抱えるネコ吉。

飛夏「今さら後悔しても遅い！」

ネコ吉、ぱっと顔をあげる。

ネコ吉「だな。そりやそうだ。クソして寝るか」

飛夏「んなっ」

ネコ吉「監視役ってことは、お嬢さん、オレんち来んの？」

飛夏「無論だ。逃がすか」

ネコ吉「女の子がオレの部屋に！ まじか。華やくなあ。なんせ汚ねえとこだけど、我慢してくれよな。じゃ、こっちなね。お足元お気をつけて」

ネコ吉、歩き出す。

飛夏、調子が狂う。

飛夏「こいつ、どういう神経してる。わかってんのか。五日後に死ぬって！」

○ボロ長屋・外（朝）

ちゅんちゅんとスズメが鳴いている。

○同・ネコ吉の部屋（朝）

ネコ吉の大いびき。

殺風景な部屋に瓦版作りの一式がある。

土間で寝ているネコ吉。

飛夏「ああああああ、う、る、さあーい！ いい加減にしろ、貴様は虎か！」

ネコ吉の顔をたたたく飛夏。

ネコ吉はむにやむにや言って起きない。

飛夏「なぜ、この死にかけが熟睡して、私が眠れぬ夜を過ごさねばならない！ 信じられん！」

ネコ吉「……う、うん？ 起きた？ ヒナ」

飛夏「ずっと起きてる、貴様のいびきのせいであと、人の名を勝手に略すな！ 気安い！」

起き上がるネコ吉。

ネコ吉「だって。飛夏なんてこじやれた名前の町娘がいるかよ？ へたに目立つとまずいんじゃないの？ ヒナちゃん」

飛夏「く」

ネコ吉「ああ、なんか、体いたい」

飛夏「そんなとこで寝るからだ、バカ」

ネコ吉「じゃ、一緒に寝ればよかった？」

床には布団がひとつだけ敷いてある。

飛夏、ネコ吉をたたたく。

ネコ吉「いだっ！」

飛夏「私に寢床を譲る必要などなかったのだ！ あんな煎餅布団あってもなくても変わらん！」

ネコ吉「朝からにぎやかだな、ヒナは。うちに人がいるっていいもんだなあ。誰かと暮らすなんて、いつぶりだろ」

飛夏「殴られて和むな！ 変態か！」

大きな伸びをするネコ吉。

ネコ吉「じゃ、さっそく行きますか！」

飛夏「行くって、どこに？」

○なじみの呑み屋・中（朝）

店に入るネコ吉と飛夏。

ネコ吉「オヤジ、やってるう？」

飛夏「朝っぱらから飲み屋か！」

オヤジ「やってるわけねえだろ！ スズメがちゅんちゅんいつてる時分に！」

料理の仕込みをしているオヤジ。

カウンターに座るネコ吉。

ネコ吉「なに作ってるの？ 味見しようか？」

オヤジ「食うなら払えってるんだ」

ネコ吉「金、金、金、口を開けば金の話ばっか！」
オヤジ「てめえ、今までのつけがいくらたまって

んのかわかって言ってるんだろうな？」

ネコ吉「そーいやさ、オヤジ」

オヤジ「話変えてきたな」

ネコ吉「あの話、どこで聞いた？」

オヤジ「どの話？」

飛夏もカウンターに座る。

ネコ吉「出る家間違えた女幽霊の話」

飛夏がネコ吉を見る。

オヤジ「あれか。髪結屋のオヤジだよ。それよか、

ネコ吉、そちらのお嬢さんは？」

ネコ吉「あ、気になる？」

オヤジ「てめえが女連れってのは珍しいからな」

ネコ吉「紹介する。新しい彼女」

ネコ吉をはたく飛夏。

ネコ吉「違うか」

飛夏「違うわ！」

オヤジ、ネコ吉と飛夏の前に仕込んでた

食べ物を出す。

ネコ吉「お、オヤジい」

飛夏「これは、すまない、私まで」

オヤジ「いいの、いいの。なんか不憫になっちまって。ネコ吉、新しい彼女ってのはな、古い彼女がいたヤツが言うんだぞ。あわれなヤツ」
ネコ吉「ほっとけ！」

○髪結屋・中

髪を結っている人々。

何気なく入口の方を見てハツとする客。

客の反応に気づいて髪結屋のオヤジも入口の方を見る。ハツとする。

ネコ吉と飛夏が店に入ってきたところ。

ネコ吉「ちよいと邪魔するよ」

いそいそとネコ吉の方へ来るオヤジ。

髪結屋のオヤジ「いらっしやい、旦那。今日は何
用で？」

オヤジは落ち着かない様子。

ネコ吉「ちよつと聞きたいことがあって」

髪結屋のオヤジ「なんでございやしよ？」

ネコ吉「出る家を間違えたって幽霊のウワサ、知
ってるよな？ あれって、元ネタ、どこの誰？」

髪結屋のオヤジ「言ったら、その、旦那、……帰
っていただけますか？」

飛夏「なに？」

ネコ吉「帰るよ。長居はしない」

髪結屋のオヤジ「申し訳ねえ、旦那」

ネコ吉「いきなり来て悪かったな」

飛夏「？」

飛夏「？」

飛夏、二人の会話が気にかかる。

○大通り

歩くネコ吉と飛夏。

ネコ吉「さすが髪結は江戸一の情報通。一発だな」

飛夏「ネコ吉、お前、嫌われてるのか？」

ふりむくネコ吉。

ネコ吉「そうだよ」

飛夏「なぜ？」

ネコ吉「なぜって」

飛夏「もし、お前が上様の御威光に傷をつけるよ

うな輩なら、私が斬って捨てねばならない」

ネコ吉「そりゃ困る。まだ死にたくねえもん」

ネコ吉、気にせず歩いて行く。
飛夏「む」

飛夏、ネコ吉について行く。

○十兵衛長屋・路地

ウワサの長屋に来たネコ吉と飛夏。

ネコ吉、九郎衛門の部屋の戸を叩くが、
中から反応はなし。

ネコ吉「留守か」

戸の隙間から部屋をのぞくネコ吉。

飛夏「ネコ吉」

ネコ吉は戸にはりついてのぞいたまま。

ネコ吉「ちよい待ち」

部屋の中は暗く、よく見えない。

飛夏「ネコ吉！」

ネコ吉「ん？」

ふりむくネコ吉。

ネコ吉の後ろには、飛夏と一緒に長屋の

大家じゅうべえの十兵衛（55）と幼い孫がいる。

十兵衛「おい、ここで何してる！」

ネコ吉「あらら」

十兵衛「わしはこの大家だ。お前、泥棒か！」

ネコ吉「やあだあ、大家さあん！」

ネコ吉、こわもての十兵衛にすりよる。

ネコ吉「探してたんすよ、大家さん。オレ、部屋
探してて、この辺がいろいろ聞いてたからさあ」

飛夏「こいつ」

十兵衛「なにに」

大家は破顔一笑。

十兵衛「あんた、部屋探しかい、それを早く言い
なさいよ！ 今ならほとんど空いてるよ！」

十兵衛の後ろに隠れている孫が十兵衛の
着物の袖をちよいちよいとひっぱる。

十兵衛、それに気づくと、ネコ吉に。

十兵衛「兄さん、悪いがちよつと待っててくれ。
先にこつちを済ませてくる。なに、そう時間は
かからないから」

十兵衛は小脇に抱えたたらいを持ち上げ
て見せる。中には泥だらけのレンコン。

ネコ吉「それって、レンコン？」

十兵衛「きんぴらもいいが天ぷらが絶品でね。裏の池でわんさととれる。底なし沼なんて言われて人が近づかないもんで、穴場も穴場さ」

見れば十兵衛と孫の足元は泥だらけ。

十兵衛に隠れている孫と目が合うネコ吉。

ネコ吉、にこっと孫に笑いかける。

孫もにこっと笑い返す。

ネコ吉「さすが、いいとこ知ってるね」

○同・井戸端

井戸の水をくみ上げるネコ吉。

ネコ吉「どりゃーっ！」

ざあっと水をたらいにあける。

水しぶきにきやつきやとはしゃぐ孫。

ネコ吉も笑う。

レンコンの泥を洗う大家と飛夏。

十兵衛「悪いな、手伝わせちまって」

飛夏「そういう流れだ。気にするな」

十兵衛「あんた、変わったかみさんだね」

飛夏「かみさんではない！」

ネコ吉「妹だよ。いい歳して人づきあいがヘタで

困る。ど田舎から出てきたばっかです」

飛夏「むっ」

十兵衛の隣にしゃがんでネコ吉もレンコンを洗う。

十兵衛「じゃ、なにかい、二人で住むのかい？」

ネコ吉「いや、住むのはオレだけなんだ。でも、

一人暮らしは寂しいし、幽霊でも出てくれりや

気がまぎれるんだけど。そんな部屋ってないか

なあ？　なんて」

十兵衛「幽霊？　あんたも変わってるねえ」

ネコ吉「そうかな？」

十兵衛「あいにく、ここに幽霊部屋はないな」

ネコ吉「さっきの部屋は？」

十兵衛「ん？」

ネコ吉「さっき、オレが見てた」

十兵衛「あそこには人が住んでる」

ネコ吉「どんな人？」

十兵衛「浪人さ。最近じゃめったにないようない

い若者で、越してまだひと月だったか」

ネコ吉「前の住人は？」

十兵衛「前も独身の浪人だったが、そっちは女っ気がありすぎて好かない男だったな。入れかわり立ちかわり別の娘が来て。ありや悪い男だ」

ネコ吉「へえ」

十兵衛「今いるお侍さんはそんな浮ついたところではなくてね。最近できた彼女ひとすじ。奥手な青年だよ、こっちが見ててやきもきしてくる。門限になりやその木戸も閉めなきやなんないが、他に住んでる人もいないし、たまあに開けといてやったりしてな。こりや内緒だぞ。そこのでかいの、持ってくるか？」

洗ったレンコンを取って差し出す十兵衛。

ネコ吉「んじゃ、お言葉に甘えて、ごち！」

ネコ吉、にこっと受け取る。

○同・路地（夜）

月夜。

コオロギが鳴いている。

木戸を開けてネコ吉と飛夏が入ってくる。

ネコ吉「ホントに鍵かかってねえ。不用心だな」

飛夏「こんな鍵、かかってたところでぶち破るが」

ネコ吉「ヒナはね」

ネコ吉、九郎衛門の部屋の前へ。

戸のすきまから灯りがもれている。

部屋の中をのぞくネコ吉。

室内に九郎衛門の後ろ姿がある。

ネコ吉「おお、いたいた！ あの野郎だ」

ネコ吉、戸から離れ、そのへんに置いてあるものを踏み台にして身軽に部屋の向かいの屋根に登る。

飛夏「お前、どこでそんな芸当を」

ネコ吉「来いよ、ヒナ」

飛夏も同様にひょいと屋根に登る。

○同・屋根の上（夜）

座っているネコ吉と飛夏。

ネコ吉、飛夏に菓子を渡す。

ネコ吉「ほれ。食っとけ。今日は夜更かしだぞ」

飛夏「楽しそうだな」

ネコ吉「そりやもう！」

ネコ吉は菓子をはおぼりながら上機嫌。

ネコ吉「このネタさ、ヒナの大好きな上様も言つてたけど、牡丹燈籠って話にそっくりなんだよな。牡丹燈籠って知ってる？」

飛夏「死んだ女と逢瀬を重ねる男の話だ」

ネコ吉「男は幽霊女に憑りつかれてげっそりやつれて死にかけ、骸骨なんか抱いて話しかけちゃったりしてさ。これ、実際どうなのって。もう、期待で胸がきゅんきゅん高鳴っちゃうだろ！」

飛夏「全然」

ネコ吉「オレ、幽霊見るのはじめて！」

飛夏「ネコ吉、忘れてないか。上様のご注文はハッピーエンドだ。元ネタの通りなら男は女に引つ張られてあの世行き。死ぬんだぞ」

ネコ吉「だから、オレが来たんだろ？」

飛夏「む？」

ネコ吉「しっ！ 来た！」

○同・路地（夜）

カラ〜ン、コロ〜ン。下駄の音がする。

ぽっと灯る灯籠には牡丹の花の絵。

つゆが九郎衛門の部屋の前にくる。うつむき、幽霊のようなおぼつかない足取り。その様子を屋根の上から身をひそめて見ているネコ吉と飛夏。

九郎衛門の部屋の戸が開く。

笑顔で彼女を迎える九郎衛門。痩せ細つて目の下にクマ、疲れきった不健康顔。

つゆ、部屋に入る。

九郎衛門、戸を閉める。

飛夏「あれが幽霊か」

ネコ吉「おらよっと」

屋根から飛び降りるネコ吉。

飛夏も続いて降りる。

飛夏「やけにはつきり見える幽霊だな」

ネコ吉「しっ。そこ、静かに！」

戸に耳をつけるネコ吉。

小声で語り合う男女の音がする。

ネコ吉「ではでは拝見。あの世の女の御尊顔、二目と見れぬ化け物か、はたまた羞月閉花の美女様か」

飛夏「さつきちよつと見えただろ」

部屋をのぞくネコ吉。

ハッと息をのむ。

飛夏「どうした」

薄暗い部屋の中、こちらに背を向けている九郎衛門。

その手に大切そうに抱えているのは、

ネコ吉「ど、ど、どどどっ！」

髑髏に見える。

飛夏「どうした、なにが見える、ネコ吉」

九郎衛門は人の頭蓋骨を抱き、優しく撫でながら何やら話しかけているようだ。

ネコ吉「ヒナ……！」

ネコ吉、とてもいい顔で振り向く。

ネコ吉「夢がいつぱい、胸いつぱい！」

飛夏「お前は何を言っている」

ネコ吉「飛び込もうぜ！」

飛夏「は？」

○同（朝）

まだ薄暗い夜明け前。

つゆが九郎衛門に見送られて出ていく。

○同・九郎衛門の部屋（朝）

つゆを見送った九郎衛門は、戸を閉め、布団に倒れこむようにして眠りにつく。

すうすうと寝息をたてて。

○同

うなされて目覚める九郎衛門。

目を開けると、ああむけの腹の上に男が

ドデンと座っている。

九郎衛門「う、ぐっ」

男は古びたネコの面をし、全身泥で黒く染まった着物、髪も肌も泥だらけ。この世の者ではない迫力がある。中身はネコ吉。

九郎衛門「なつ、誰だ！」

ネコ吉「どうも。死神です」

ぎよっとする九郎衛門。

九郎衛門、見ると、部屋の隅にもうひとり全身泥だらけでネコの面をした女がたたずんでいる。中身は飛夏。

飛夏から漂う怒りのオーラ。

九郎衛門「さ、殺気？ くっ！」

九郎衛門、逃れようともがくが、ネコ吉に押さえつけられる。

ネコ吉、九郎衛門に顔を近づけて言う。

ネコ吉「お前を迎えに来たんじゃない。夜中に来てた女のこと知りたい」

九郎衛門「……つゆの？」

ネコ吉「そう。つゆ、の。悪いようにはしない。その子、その殺気、やめてくんない？」

ネコ吉に注意される飛夏。

飛夏「努力する」

ネコ吉、九郎衛門に、

ネコ吉「ちよつと機嫌が悪いんだ。大丈夫、いきなり咬みついたりはしないから」

九郎衛門「……」

ネコ吉のおながぐうと鳴る。

ネコ吉「ありや」

九郎衛門、体の力を抜く。

九郎衛門「腹が減るんですね、死神も」

× × ×

手際よく味噌汁を作る九郎衛門。

座って待っている泥だらけのネコ吉と飛

夏。小声で話す。

飛夏「まさか、死神だと言われてまんま信じるバカがこの世にいたとは」

ネコ吉「この格好もそこそこ異様だから」

飛夏「いきなり沼に落とされたときは思わずお前を斬りそうになった」

ネコ吉「よくぞこらえた。えらいえらい」

ネコ吉とヒナに味噌汁を出す九郎衛門。

九郎衛門「こんなものしかありませんが」

飛夏「なぜ、味噌汁」

九郎衛門「ちょうど味噌がいっぱいあって」

ネコ吉「オレは文句言いません、いただきます」
面のすきまから味噌汁を飲むネコ吉。

飛夏「私だって文句は言っていない。いただく」

飛夏も味噌汁を飲む。

ネコ吉「うまい！」

九郎衛門「死神」

ネコ吉「ん？」

九郎衛門「つゆを連れてこうだったって、させない」
ネコ吉「え？」

九郎衛門「彼女は、つゆは、今はあんな風にやつ
れてますが、本当はきれいな娘なんです。死ぬ
には早すぎる。今はただ疲れてるだけで……」

飛夏、小声でネコ吉に言う。

飛夏「あれは生身の女らしい。残念だったな」

ネコ吉、飛夏を見る。お面で表情はわか
らないが。

ネコ吉「九郎衛門」

九郎衛門「はい」

ネコ吉「その不健康を極めたような青白いツラは
なに。幽霊にでも憑りつかれたみたいだな」

九郎衛門「これは、彼女の夜ふかしにつきあって
たら、睡眠不足になって。昼は昼で職探しがあ
るから寝ているわけにもいかず」

飛夏「幽霊に生気を吸い取られたわけではないら
しい」

ネコ吉、飛夏を見る。お面で表情はわか
らないが。

ネコ吉「九郎衛門、お前は昨夜、髑髏に話しかけ
てなかったか？」

九郎衛門「どくろ？」

ネコ吉「髑髏だ。まるっこくて、すべすべした」

ネコ吉をつつく飛夏。

ネコ吉「ん？」

土間の方を指さす飛夏。

ネコ吉、飛夏が指さした方を見る。

土間に味噌の壺。

そばに髑髏の柄の風呂敷がある。それで
包めば髑髏に見えるかもしれない。

ネコ吉「なっ」

九郎衛門「ああ、あれは。この味噌はつゆからも

らったんです。髑髏の柄の風呂敷なんて、さすが、しゃれた娘なんです」

飛夏「なるほど、つまり」

○（イメージ）同（夜）

薄暗闇の中、髑髏の模様の風呂敷に包まれた味噌壺を受け取る九郎衛門。

九郎衛門「わざわざ、こんな重い物を？」

ちようど、風呂敷のどくろの柄が壺の大きさとびったり。

九郎衛門、風呂敷の結び目を解く。

風呂敷の柄の出方と九郎衛門の動きが、まるで髑髏を撫でているよう。

風呂敷から壺を出す九郎衛門。

九郎衛門「ありがとう。毎日作るよ、味噌汁」

戸からは死角の壁際につゆがいる。

つゆ「いえいえ、いつもお世話になっています」

つゆ、お辞儀する。

○元の同

立ち上がるネコ吉。

ネコ吉「味噌かよっ！」

九郎衛門「え？」

冷静に戻って座るネコ吉。

ネコ吉「こつちの話。それより、あの女、つゆだ。

どうして、ここに通うようになった？」

九郎衛門「つゆは……、この部屋に住んでた前の住人、前野新三郎と恋仲でした。でもこつぴどくふられて、失恋の痛手にふさぎこんでしまっただんです。何度も『死にたい』と繰り返し。そんなこと言われたら放っておけない。とりあえず、他愛ないおしゃべりをして過ごすだけでいいから、毎日ここに来るようにと言ったのはオレの方です」

ネコ吉「それで、夜な夜な彼女を慰めていたと？」

九郎衛門「へ、変な言い方しないでください！

話だけです、男女の仲じゃない！」

九郎衛門は耳まで赤くする。

ネコ吉「変な言い方だった？」

飛夏「問題はあった」

九郎衛門「つゆに手を出すなんてできません。つゆは今でも前野に惚れてます。つゆの家は日本橋で大きな店をやってて、前野はそれ目当てでつゆから金をむしり取るヒモでした。はじめは甘い言葉でかどわかし、つゆの小遣いが底をつきだすととたんに冷たくなった。前野には他に何人も女がいたようです。そっちらから金を取ってた。つゆが前野の浮気に気づくと、前野はつゆを紙くずでも捨てるみたいに簡単に捨てたんです。前野にとつてつゆはただの金づるだった。それでもつゆにとつては、死ぬほど恋した初恋の人でした」

ネコ吉「……」

九郎衛門「急につれなくなった前野の気を引こうと、つゆは『今まで渡した金を返せ』とすねてみた。それは大失敗でした。翌日、前野はここを引き払った」

ネコ吉「素早い」

飛夏「そして入れかわりにお前が来たのか」

九郎衛門「つゆはそれを知らず、しばらくうちの戸を叩いていました。知らない女が夜中に押しかけてきたら誰だって怖いでしょう。でも、いつまでも人違いしてる彼女がだんだん不憫になつてきて、ある晩、伝えてみたんです」

ネコ吉「新三郎は引越した、つて？」

九郎衛門「はい。そしたら……」

○（イメージ）同（夜）

愕然としているつゆ。

うるうると涙を浮かべる。

つゆはその場にへたりこみ、泣き出す。

九郎衛門の声「つゆは泣き出したんです。子供みたいに。お金なんてどうでもいい、ケンカでもいいから声が聞きたい、一目でいいから会いたい、いなくなるなんてひどすぎる、と」

同情してつゆの肩に手を置く九郎衛門。

九郎衛門の声「ついさっきまで悪霊だと思ってた女が、普通の娘に見えました」

○元の同

九郎衛門「どんなにひどい仕打ちをされても、恋した男のことは忘れられない。そんな風に人を愛せるつゆには、オレは、幸せになつてほしい。死ぬなんて言わないでほしい、生きててほしい。オレは、つゆの笑顔が見たいんです」

ネコ吉「九郎衛門、お前……」

九郎衛門「彼女について知つてゐることはこれですべてです。死神、つゆを連れていくつもりなら、オレは全力で阻止します。前野さえみつけだせれば、つゆと前野を会わせて、この恋をちゃんと終わりにさえできれば、つゆはまた前を向いて生きていけるはずですよ！」

ネコ吉「その前野は今どこに？」

九郎衛門「前野は……」

唇をかむ九郎衛門。

九郎衛門「どこにもいない。もうずっと探してるけど、どこを探しても影も形もないんです」

ネコ吉「なるほどね」

ネコ吉、ネコの面をはずす。

ネコ吉「そういうことか」

○なじみの呑み屋・中（夜）

テーブル席にいるネコ吉、飛夏、山那、

朝霧、本院蔵。

山那「おいおい、まさか、この一件、たんなる痴情のもつれとは言わないよな？」

ネコ吉「でも、つばいね」

山那「バカな！ 上様にご納得されなければ！」

飛夏「打ち首」

ネコ吉「四人並んで？」

山那「あああああああーっ！」

朝霧「かといつて話を盛るのも禁止」

本院蔵「このネタで大丈夫か？」

ネコ吉「今さら変えられないし」

飛夏「先祖の墓参りは済ませておけ」

山那「いやあああああああ！」

男1の声「てめえ、殺す気か！」

突然の怒声。

声の方を見るネコ吉、飛夏、山那、朝霧、本院蔵。

カウンターでオヤジの胸ぐらをつかんでいる男1と連れの男2。ガラの悪い連中。

男2「オヤジよ、この店じゃ雑炊におもしろい具を入れてんなあ、おい！」

男2が雑炊から釘をすくい取る。

男1「いつてえ、いてえよ、口を切っちゃまった！」

男2「どうしてくれんだ、ええ、オヤジ！　かわいい弟分が泣いてんじやねえか！」

それを見ているネコ吉一同。

飛夏「ひどい言いがかりだ」

山那「こういうのはよくあるのか？」

ネコ吉「たまあに」

山那「こつちに害はないよな？」

ネコ吉「黙ってればね」

山那「ああ、よかった」

胸ぐらをつかまれたまま、オヤジは声をふりしぼる。

オヤジ「出されたもんが黙って食べねえなら、出てけ、バカども！」

男2「すなおに謝れねえのか！」

男2が雑炊を床にたたきつける。

割れる茶碗。

男1「医者代、払え！　クソジジイ！」

オヤジが突き飛ばされる。

床に転げるオヤジ。

オヤジ、腰を痛めてうめき、立てない。

オヤジ「く、ちくしょう、この……！！」

それを笑う男1、男2。

男1「ザマあねえぜ！」

男2「両の手ついて謝れ！」

ネコ吉「その辺にしとけよ」

ネコ吉が歩み出る。

ネコ吉「威勢がいいのはいいけどよ、こんなせまつ苦しいとこで暴れてくれんな」

男1「ああ？　んだ、てめえ！」

男2「すっこんでろ！」

ネコ吉「すっこめねえな！　せめえから！」

飛夏「ネコ吉！」

山那「バカ、関わるな！」

山那が小声で言う。身を寄せ合って怯え

ている朝霧と本院蔵。

ネコ吉「弁償しろ」

男2「あ？」

ネコ吉「それ」

ネコ吉が指さす。

床で割れている茶碗。

ネコ吉「弁償しろ」

男1「てめえ、聞こえねえのか、しゃしゃり出てくんなって言ってんだよ、ボケ！」

ネコ吉「そんな汚ねえ欠け茶碗、なんの価値もねえけどな。ヘタしたらオヤジがごみ溜めから拾ってきたもんかもしんねえけどよ、てめえらに割られる筋合いもねえ。弁償しろ！」

男1「うっせえ、バカ野郎！」

男1が刃物を取り出し、構える。

山那「ネコ吉！」

ネコ吉は怖気づくことなく堂々。

ネコ吉「んな物騒なもん出すなよ。オレはただ、ここで暴れられちゃ困るって言うてんだ。ここは、ポロいし、汚ねえし、まじいし、割りに高えし、オヤジもガミガミうるせえ死にぞこないだけどな、オレにとっちゃ江戸一番の飲み屋なんだよ」

男1「ごちゃごちゃ抜かしてんじゃねえ！」

ネコ吉「なくなってもらっちゃ困んだよ、オレがつけで呑めんのはここだけなんだからなっ！」

飛夏「そこか」

男1「野郎っ！」

刃物で襲いかかってくる男1。

ネコ吉、男1から刃物を奪って捨てる。

あまりに鮮やかな手並み。

ネコ吉「いい子に出来ねえヤツはおしおきだ、ばかたれっ！」

男1と男2、二人を相手に立ち回るネコ

吉。素人とは思えないアクション。

飛夏「ネコ吉、お前……」

男2「くそ、てめえ！」

男2が刃物を拾い、飛夏に襲いかかる。

ネコ吉「ヒナ！」

わあきゃあと逃げるおとぎ衆の三人と違

い、飛夏は腰をすえ受けて立つ構え。
男2が刃物を振り下ろす。
その瞬間。

飛夏「！」

山那、朝霧、本院蔵も目をみはる。

男2「……くっ！ てめえ！」

飛夏に向けられた刃を素手でつかんで止
めているネコ吉。

飛夏「ネコ吉！」

ネコ吉の手から血が流れる。

ネコ吉「……いつてえな！」

ネコ吉、男2を殴る。

殴られた勢いで転げる男2。

ネコ吉「女、狙ってんじゃねえぞ！」

飛夏「お前……！」

男2、そのまま気絶。

男1「あ、兄貴！ てめえ、許さねえぞ！」

叫ぶ男1の頭に茶碗がヒットして割れる。
ぶつけたのは棒きれを支えに立っている
オヤジ。

オヤジ「喧嘩すんなら表出る！ このタゴサクド
もっ！」

ネコ吉「オヤジ！ 大丈夫か？」

オヤジ「お前もだ、バカネコ！ オレの店が無茶
苦茶じゃねえか、弁償しろっ！」

○同・外・店の前（夜）

店から蹴りだされるネコ吉。

ネコ吉「いやん、オレも？」

飛夏、山那、朝霧、本院蔵も出てくる。

男1「くっそ、てめえ！」

先に追い出された男1と男2。

男1に肩を借りて立っている男2が、は
っとする。

男2「ま、待て！ 思い出した、こいつは！ も
う行け！ 行くぞ！」

男1「兄貴？」

男2「早く！ いいから行けっつってんだ！」

男1「ああ？ なんだよ？」

男1と男2が去る。

それを見送るネコ吉。

ネコ吉「オレの店に二度と来んな！」

飛夏「お前の店じゃないだろ」

ネコ吉「塩まけ、塩！」

飛夏、ネコ吉の手を取る。

ネコ吉「ん？」

血が出ている。

飛夏「ケガ、してる」

ネコ吉「そんなん、なめときゃ治る」

飛夏「バカ！　どんな傷も命取りになるんだ」

飛夏、着物を破ってネコ吉の手に巻く。

ネコ吉「……」

飛夏「私は守られる必要などなかった。お前がケガする必要などなかったんだ！　心外だ。この私が素人に守られるなんて……いや、お前は、本当に素人か？　ネコ吉」

飛夏、ネコ吉をじっと見る。

にっこりと笑い返すネコ吉。

ネコ吉「ありがとう。ヒナ。優しんだな」

飛夏「ばつ、バカ言え！」

ネコ吉、山那に、

ネコ吉「なんか酔いがさめちまったな。他で呑み直さねえか？」

飛夏「話をそらすな！」

ネコ吉「もちろん、おとぎ衆のおごりで！」

○吉原・茶屋・廊下（夜）

ふりむく花魁。まばゆいほどにゴージャ

スな美女の紅雲太夫。

紅雲「あれえ、鬼さん？」

きらびやかな吉原の茶屋。禿を二人連れ

た紅雲が通りがかりのネコ吉に近よる。

ネコ吉「お、紅雲。元気してたか？」

紅雲「もしや、わっちを探してここに？」

ネコ吉「いや、便所を探して一階に」

紅雲「んもう、いけずは相変わらず」

紅雲、禿に小遣いを渡す。

紅雲「お前たちはそこらで遊んできなんし」

禿が去り、紅雲はネコ吉の腕を取る。

紅雲「わっちはもう下衆のお相手にはほとほと

んざり。あちらさんもこちらさんも、財布は重いが人は軽い。ぼんぼんには飽きんした。本物の殿方にお会いしたいと、お月様にお祈りしていたところでありんす。鬼さんのお座敷はどこら？」

ネコ吉「一番狭いとこだけど」

紅雲「あれまあ、鬼さんともあろうお方が」

ネコ吉「その呼び名はやめといて」

紅雲「小さいお部屋なら隠れるにちょうどいい」

ネコ吉「え、紅雲、来る気？」

紅雲「さらってくれなんし。いつぞやみたいに」

○同・大きな座敷（夜）

遊女をはべらせ、呑めや歌えやどんちやん騒ぎをしている商人のグループ。

品のないぼんぼんが酔っぱらっている。

ぼんぼん「花魁はどこ行ったあ！ 紅雲はあ！」

○同・小さな座敷（夜）

紅雲に酌をされて緊張している山那。

紅雲「そんなに緊張しなさんな」

山那「き、緊張などしておらん！ な！」

朝霧「そ、そうだ！」

本院蔵「全くいつも通りだ！」

朝霧と本院蔵も緊張でガチガチ。

飛夏「しようもない」

ネコ吉、笑う。

紅雲「それでは、主さま方はここでずっと待ちぼうけを？」

山那「ちよつと待てと言われたまま、ずっと食事と酒だけだ」

ネコ吉「遊女のすっぱかしは珍しくもねえし、屋根と壁があつて、うまい酒が飲みやオレは十分だけど」

紅雲、笑う。

紅雲「他の子がいなくて、わっちは助かりんした。

それにしても、鬼さんのお連れさまがまさかお侍さまとは。どうりで、こんな物置部屋に」

ネコ吉「こらこら、紅雲」

山那「ん？ 侍はいけぬのか？」

紅雲「ええ、いけませぬ。お侍さまはみな貧乏。わっちらに言わせれば外れくじ」

山那「外れくじ」

ネコ吉「悪気はない、はず。紅雲は口が悪いんだ」
山那「気にするな。もつと口の悪いお方にお仕えしている」

飛夏が咳払いする。

紅雲「遊び代を踏み倒されたら、つけを払うのはわっちらおなご。お客にするなら大きな商いの

旦那衆が一等よい」

ネコ吉「紅雲、いつまでもこんなとこでさぼってつと、またやり手ババアにしめられるぞ」

紅雲「いやでありんす。あつちのお客より、こつちのお侍さまの方がかわいい」

山那「かわいいとはなんだ、かわいいとは！」

飛夏「喜ぶな。情けない。この威厳のない貧乏侍がどののしられてるんだぞ」

ネコ吉「言うな、言うな、ぶっちゃけて」

紅雲「かわいい上におバカさん。そもそも、お侍さまのお給金はお米、お米の値を決めるのは商売人。それがいけませぬ。まだ十にもならないわっちの禿でもわかること。旦那衆がお米を買いたたけば、あちらは儲け、お侍さまに銭は渡りませぬ。おかしな仕組みでありんす。それでは、お侍さまに遊び代があるはずも」

飛夏「上様のやり方が悪いと言うのか！」

立ち上がる飛夏。

飛夏「この女、無礼にもほどがある！ 我慢ならん！」

ネコ吉「こらこら、ヒナ」

紅雲「あれ、こわい。わっちは何も。ね、主さま」

紅雲、山那にそつと抱きつく。

ご満悦で骨抜き山那。

飛夏「黙って聞いてればべらべらと悪態つきおつて！ おかしな仕組みというならそつちほどうだ！ 客から金を取っておいてこんな物置につめこみ、ほつたらかしにするくらいなら、はじめから店に通すな！」

紅雲「それを決めるのはわっちらではありませぬ。今夜も何人まわれれば勤めが終わるやら。ふれる

客ならふらなければ、遊女の体が持ちませぬ」

飛夏「こいつ、悪びれもせず！」

紅雲「ここは吉原でありんす」

飛夏、紅雲をにらむ。

紅雲、笑みを返す。

飛夏「毒舌女！」

紅雲「つんけん娘」

ネコ吉「……なんか、ごめんなさい！」

山那「いいんだ、なんていうかな、この針のむしろ感、責められるのも、嫌いじゃないというか、むしろ、もつとちようだい」

ネコ吉「うわ、目覚めてる。上司が上司だけに」

山那「悪いな、私ばかり紅雲を独り占めして」

朝霧「いえいえ。私はこう、欲を言えば、もうちよつと顔の造作の特殊な方が好みでして。鼻が低くて、目が離れてて、えらが張ってて、歯並びが悪いような」

本院蔵「私はこう、ふくよかな方が。のしかかられると身動き取れなくなるくらいなの」

飛夏「そろいもそろって変態か！」

○同・階下（夜）

手を振って店を出ていく酔っぱらいの山

那、朝霧、本院蔵。

手を振り返す紅雲。

紅雲「また来てくれなんし」

ネコ吉と飛夏も帰り際。

ネコ吉「紅雲」

紅雲「鬼さん」

ネコ吉「前野新三郎って侍を知ってるか？ 女か

ら金をまきあげる最低の野郎だ」

紅雲「今日はそれを聞きに？」

ネコ吉「別に」

紅雲「そういえば、わっちら遊女には目もくれず、大店の娘ばかり食っちゃまう意地汚いのがいると、どこぞの誰かが言ってたような」

ネコ吉「詳しく」

紅雲「でも、前野なんて名ではありんせん。あれは確か、黒崎丈之助とか」

ネコ吉「恩にきる」

行こうとするネコ吉。

紅雲「鬼さん、これを」

紅雲、ネコ吉に一両小判をそっと渡す。

ネコ吉「紅雲？」

紅雲「鬼さんからお代はいただけませぬ」

ネコ吉「これはオレじゃなくて、あいつらから」

紅雲「次は鬼さん一人で来てくれなんし」

紅雲、ネコ吉の頬にキスする。

紅雲「必ず」

きびすを返し、店の奥へと向かう紅雲。

飛夏、紅雲とすれ違いざまに。

飛夏「お前、なぜ、あいつを鬼さんと呼ぶ？」

紅雲は飛夏に笑顔を返す。

紅雲「さあ。むかしのこと。忘れんした」

去る紅雲。

飛夏「……いい匂い。ムカつくっ！」

ネコ吉、受け取った小判を見ている。

ネコ吉「……金」

ぴかぴかの小判。

○大通り（朝）

朝焼けに染まる空。

誰も起き出していない早朝の通り。

○ボロ長屋・ネコ吉の部屋（朝）

布団にくるまって寝ている飛夏。

静かな寝息をたてている。

飛夏を起こさないよう静かに戸を開ける

ネコ吉。

ネコ吉、ふりむいて飛夏を見る。

飛夏はネコ吉に背を向けて寝ている。

ネコ吉「……」

ネコ吉、家を出ていく。

目を開ける飛夏。起きている。

○郊外の街道

緑ゆたかな田舎風景。

一本道をネコ吉は歩いて行く。

地元の農民や旅の者、馬が行きかう街道。

距離をとってネコ吉のあとを追う飛夏。

飛夏「あいつ、あの一両持って逃げる気か」

ネコ吉が角を曲がって森の小道に入る。

飛夏「む？」

○森の小道

ひとり歩いて行くネコ吉。

ふと、ふりかえる。

後ろには誰もいない。

ネコ吉、また歩いて行く。

木の上からネコ吉を見ている飛夏。

飛夏「街道をそれた。この先に何がある？」

○蟲玄庵の療院・外観

森の中にたたずむ療院。

○同・中

ケガ人や病人に治療をしている医者

のむくろあん蟲玄庵（47）。こちらに気づく。

蟲玄庵「おう。来たか。ノラネコ」

部屋に入ってくるネコ吉。軽く手をあげて応じる。

ネコ吉「よ、ヤブ。あの子は？」

蟲玄庵はいま手が離せない。

蟲玄庵「外にいないか？」

ネコ吉「ん」

○森の薬草園

木漏れ日がさす花畑。

盲目の少女、りん（16）が花を摘む。

手探りで花の形を確認し、ひとつひとつ

丁寧に摘んで、抱えたザルに入れる。

手を伸ばして花を探すりん。

宙をさまようりんの手。

その手を握る男の手。

りん「あ……」

りん、男の手を確かめ、ぎゅっと握る。

うれしそうに笑顔になるりん。

りん「虎？」

りんの手を握っているネコ吉。

ネコ吉「新しい花が咲いてるな。紫の」
りん「虎っ！」

ネコ吉に抱き着くりん。

放りだしたザルから花がこぼれる。

ネコ吉もりんを抱きしめる。

ネコ吉「りん」

○ 蟲玄庵の療院・中

患者の治療をしている蟲玄庵。

りんの笑い声が聞こえる。

治療の手を休め、縁側の方を見る蟲玄庵。

縁側に座っているネコ吉とりんが見える。

よく笑っているりん。

ネコ吉は大げさな身振り手振りでなにか話している。

その動きからして、まともな話ではない。

ネコ吉もよく笑っている。

蟲玄庵もふっと笑い、治療に専念する。

○ 同（夕）

最後の患者を送り出し、一息つく蟲玄庵。

ネコ吉「終わったか？」

ネコ吉が来る。

蟲玄庵「こうも病人ケガ人が多いと、診てやるこ

つちも倒れそうだ」

ネコ吉「紅雲と同じこと言ってるな」

蟲玄庵「会ったか？」

ネコ吉「昨日」

蟲玄庵「元気にしてたか？」

ネコ吉「たぶん」

蟲玄庵「あそこも病人が多いからな。まともな医者
者をもっといれればいいんだが」

ネコ吉、懐から瓦版紙に包んだ一両小判
を出し、蟲玄庵に渡す。

蟲玄庵、受け取り、一両を見る。

蟲玄庵「どうした。いつも小銭のくせに」

ネコ吉「ちよつとな。りんのこと、頼むな」

蟲玄庵「わかつてる」

立ち去るネコ吉。

それを見送る蟲玄庵。

蟲玄庵「それで？」

蟲玄庵、ふりむく。

蟲玄庵「ケガ人でも病人でもない娘がここに残ってなんの用かな？」

部屋の隅から出てくる飛夏。

飛夏「あいつとは古い知り合いか？」

蟲玄庵「それほどでもないが」

飛夏「言葉を交わさずとも互いに気心知れているような話しぶりだった」

蟲玄庵、くくつと笑う。

蟲玄庵「不気味なことを言う娘だ」

飛夏「知りたいことがある」

蟲玄庵「オレに答えられることかな？」

飛夏「ネコ吉という男、いったい何者だ？」

蟲玄庵「それは難しい問いかけだ」

蟲玄庵、立ち上がる。

飛夏「逃げるな。次第によっては力づくでも答えさせる」

蟲玄庵「そのこの棚にまんじゅうがあつたはずだ。

食べるだろう？」

飛夏「……」

○森の小道（夕）

暗くなり始めた森の中を歩くネコ吉。

蟲玄庵の声「あの男は、ちよつと前まで虎吉と呼ばれていた。深川の虎吉といえは、まあ、そこそこ知れた名でな。タチの悪い連中とつるんでタチの悪い仕事をする、あいつはいわば、筋金入りの悪党だった」

風が吹き、木の葉が舞う。

○蟲玄庵の療院・縁側（夕）

座っている飛夏と蟲玄庵。

飛夏「悪党？ あいつが？」

まんじゅうをかじっている飛夏。

蟲玄庵はりんが摘んできた花をむしろの上になべている。

蟲玄庵「まあ、一口に悪党といっても、あいつはかたぎには手を出さない。虎吉の仕事は、人には言えないようなことで儲けてるヤツらから、

盗られてもお上に泣きつけないようなクロい金を巻きあげる、そんな裏家業だった。あっちは道理の通じない世界でな、あいつも数え切れないほど無茶をした。あの頃のあいつなら、金なんて望めば望むだけ手に入ったろうな。濡れ手に粟のボロい商売だったようだが、あるとき、カモにした相手がまずい用心棒を雇っていた」

飛夏、眉をひそめる。

○（イメージ）廃寺・境内

雨の中、無残に斬り殺されて倒れている男たち。戦ったあとがある。

水たまりに流れこむ彼らの血。

蟲玄庵の声「あつちの世界じゃよくあることだ。

あいつがつるんでた仲間はみな殺し、虎吉も半殺しにあつたが、なんとか一人逃げだした」

○（イメージ）大通り

雨の中、今にも倒れそうな足取りで歩く血だらけの虎吉（25）。

虎吉は雨に打たれるままずぶぬれ。

虎吉が歩いたあとには血の足跡ができ、

雨に打たれてにじんでいく。

蟲玄庵の声「悪党の最期なんて、えてしてあつけないものだ」

傘をさして道行く人々は虎吉を見て驚き、避ける。

ばったりと前のめりに倒れる虎吉。

虎吉に降りしきる雨。

虎吉はぼんやりと地面を見つめている。

雨で流れる真っ赤な血。

もう動く力もない。

蟲玄庵の声「虎吉は大通りで倒れた。そこにはたくさんの通行人がいたはずだが、虎吉にかまうヤツなんて一人もない。あいつが深川の虎吉である以上、それは当然のことだった。死を覚悟し、あいつは少し笑った。つまらない人生だった、ってな」

目を閉じる虎吉。

降り続ける雨。

ふと、雨が止む。

ゆっくり目を開ける虎吉。

虎吉「……？」

目の前に子供の足がある。

見上げる虎吉。

傘をさした、りん（11）がいる。

虎吉を傘に入れてくれている、りん。

りん「ケガ、してるの？」

虎吉「……」

りん「ケガ、してるの？」

蟲玄庵の声「それが、りん。あの子だった」

○（イメージ）りんの家・外観

郊外の古びたボロ屋。

開けはなつた障子の奥に、布団に寝かせられた虎吉の姿がある。季節は夏。庭の木には青々とした葉。りんは水をくんだり、洗濯物をとりこんだり、かいがいしく働きまわる。

蟲玄庵の声「りんには身寄りがなかった。虎吉が悪党だとは知らず、小さな家に連れて帰った」
季節が過ぎ、庭に枯葉が舞う。上半身を起こせるようになった虎吉に、りんがかいがいしくかゆを食べさせている。

蟲玄庵の声「ケガをした子犬を見過ごせず拾ってやるように、あの子は虎吉を拾い、介抱し、あいつの回復を喜んだ」

季節が過ぎ、庭に桜の花が咲く。虎吉が立ち上がり、りんは飛び上がって喜ぶ。

○元の蟲玄庵の療院・縁側（夕）

むしろに花を並べ終わる蟲玄庵。

蟲玄庵「あの子の家族は殺された。身内は誰もあの子に寄りつかない。りんが天涯孤独になったのは、可哀そうに、虎吉のせいだった」

飛夏「！」

蟲玄庵「と、あのバカは思ってるようだがな」

飛夏「どういう意味だ？」

蟲玄庵「りんの父は、虎吉が金を奪い取った悪党の家で番頭をしていた。なに、主が何をして稼

いだ金かなんて知らない。ただの雇われ番頭、悪事とは無関係の男だった。そんな善良な男がある晩、主人の金を奪われ、殺さずの虎吉に生かされ、無傷で逃がされた。それも相まって主の怒りをかい、夫婦もろとも始末された」

飛夏「……ひどい、そんなの八つ当たりだ！」

蟲玄庵「そうだ。でも、虎吉がしたことのはわ寄せでりんの両親が死んだことには違いない」

飛夏「そんな……」

蟲玄庵「親の死にあいつが関わってるなんて知らないあの子にとって、一緒に暮らす虎吉は久しぶりの家族だった。あの子と暮らして、虎吉も人の心を取り戻したんだろう。金のことしか頭になかったヤツが、罪悪感なんて抱くようになつたんだから」

飛夏「……」

蟲玄庵「しばらくは穏やかな日々が続いた。でも、それも終わる。追手が虎吉を見つけ出した」

○（イメージ）りんの家・中

鍋の中でぐつぐつと煮え立っている湯。

土間には茶碗や鍋が散乱し、そこらじゅう、めちゃくちゃになっている。

土間から続く一室。床は血の海。

りんが倒れている。顔を手で覆ったまま動かない。

蟲玄庵の声「しとめ損ねた虎吉を殺しに、男たちがあの子の家に押し入った。とっさに虎吉を守ろうとしたあの子は、目をやられてしまった」顔を覆うりんの両手は血で真っ赤。床に倒れているのはりんだけではない。斬り殺された男たちの屍が累々と転がっている。

その場にひとり立ち尽くしている虎吉。

その背中。ひどく息が荒い。

虎吉の肌は血しぶきを浴びて赤く染まり、両手に刀を持っている。

刀を落とす虎吉。

虎吉「りん！」

虎吉、りんを抱き起こす。

虎吉「りん！ りん！ りん……！」

○元の蟲玄庵の療院・縁側（夕）

蟲玄庵「幸か不幸か、あの子は見ずにすんだ。虎吉があたり一面を血の海にするさまをな」

飛夏「……鬼さん」

蟲玄庵「そう呼ぶヤツもいた」

飛夏「あいつは殺さずの悪党だったって、さっき
蟲玄庵「でも殺した。結局な。あいつはがめつ
いから盗みばかりしてたが、もともとは、恐ろ
しく腕が立つことで怖がられていた。それでも
なきや、あんなバカ、とつくに死んでる」

飛夏「……」

蟲玄庵「お上にしょっぴかれる前に、あいつはこ
こに来て、オレにあの子を預けた。相手は深川
の虎吉だ、オレはありつたけふつかけてやった。
そしたら、金はないときた。それでも一生かけ
ても払うって、あいつ、土下座なんかしやがっ
て……」

蟲玄庵、思い出して少し笑う。

蟲玄庵「本来なら、あいつは死罪で間違いないなかつた。オレは金にならない仕事は引き受けない主義だが、あのかきはちようど先の公方様が夭折した折。八代目が就任すれば恩赦が出るとオレは見込んだ。で、読み通り、あいつは恩赦で娑婆に戻った。牙も爪も、すっかりなくしてな。あれじゃもう、虎とは呼べない」

飛夏「それで」

蟲玄庵、くくつと笑う。

蟲玄庵「ネコ吉というわけだ」

○同・りんの部屋（夕）

暗い一室。

りんは紫の花の香りをかぐ。

蟲玄庵の声「今もあの子の目は戻らない。それでも、あいつの声を聞けばあの子は笑う。あいつはあの子に何一つ本当のことを言ってやれない。自分が何者で、何をしてきたか」

○なじみの呑み屋・店の前（夜）

歩いてくる飛夏。

蟲玄庵の声「あいつはあの子に何か聞かれると、すべて作り話で答える。あの子はそれが嘘だと知りながら喜んで聞く。しょうもない話ばかりそれでも、くだらないことに笑って、ありえないことに夢を見て、一時でも悲しい現実を忘れて楽しめたら、あの二人には、それで十分なんだろう」

飛夏、のれんに手をかける。

○同・中（夜）

いつものようにカウンターでしゃべっているネコ吉とオヤジ。指さして笑い合う。蟲玄庵の声「恩赦で放免とはいえ、あいつはまともな職には就けない。虎吉だった男を雇うヤツなんて江戸にはいないからな。でもまあ、嘘っぱちの瓦版屋は、あいつの天職なんだろう」

飛夏、ネコ吉の隣に座る。

ネコ吉「お、ヒナ。どこ行ってた？」

飛夏「今夜は私がおごる」

ネコ吉は意外そうに飛夏を見る。

ネコ吉「どうした、急に？」

飛夏「別に」

ネコ吉「大丈夫。ここはオヤジのおごりだから！」
オヤジ「おごりじゃねえ！ つけだ！」

飛夏「たまには払ってやらないとオヤジが干上がる」

オヤジ「心配無用だ、お嬢ちゃん。今日明日じゃ干上がんねえよ。つけなんかで呑んでんのはこいつだけだしな！」

ネコ吉「ありがとな、オヤジ、オレばかり」

オヤジ「いや、払えよ、てめえも」

飛夏「つけがきくのはネコ吉が店を守ってくれるからか？」

ハッとするネコ吉とオヤジ。

ネコ吉「やだ、そうだったの、オヤジ？」

オヤジ「ば、バカ、んなわけあるか！」

飛夏、ふっ笑う。

ネコ吉「あ」

飛夏「ん？」

ネコ吉「ヒナが、笑った」

飛夏「私だって笑う。悪いか」

ネコ吉も笑う。

ネコ吉「いや。じゃ、一杯おごってもらおうか！」

○日本橋・大福呉服店・店先

にぎわう大通りに面した一等地の本店。

「大福呉服店」の看板。

ネコ吉の声「おおー、それっばい！」

○同・一室

ずらりと並ぶ衣装の数々。

陰陽師の格好をしたネコ吉。

ネコ吉「どうよ、これ！　っばいよな！　さすが御庭番、こういう行きつけがあるんだな！」

巫女の格好をした飛夏もいる。

飛夏「変装なら私たちの方がうわてだ。隠密行動が仕事だからな。上様から命令が下れば私たちはここで着替えて仕事に出る」

店の手代が飛夏の扮装に興奮している。

手代「ああ、飛夏さま！　相変わらず何をお召しになつても最っ高にお似合いでございます！　もう、完っ璧、完っ全に着こなしてございませす！　ああ、神々しい、どの角度も、いい！　私には、なによりのごちそう！」

飛夏「興奮するな、変態」

ネコ吉「オレはどう？　オレは？」

手代「どうでもいい！」

ネコ吉「うわっ、ひいきすこい」

飛夏「それで、ネコ吉、こんな格好させて何する気だ？」

手代「まさか変な趣味じゃないでしょうね！　飛

夏さまを着せ替え人形にして！」

飛夏「それはお前がしたことだろ」

手代「趣味なら他にもぜひ着ていただきたいものが！」

飛夏「お前はもう黙ってる！」

ネコ吉「ヒナ、箱入り娘をさらいに行くぞ」

飛夏「む？」

○材木問屋・店先

大通りに面した大きな材木問屋。

陰陽師と巫女の変装をしているネコ吉と

飛夏、店をながめる。

ネコ吉「ここがつゆの家だ」

飛夏「材木商」

ネコ吉「江戸じゃ毎晩どっかで火事が起きる。材木屋ほど稼げる仕事はないぜ。こりや正真正銘の大金持ちだ」

筋肉質な店の若い衆がきびきびと働いている。

ネコ吉「これだけでかい店の一人娘ときたら、三重にも四重にも箱に入った箱入り娘だな。なにをするにも誰かがくっついてて口を出す。守られてんだか、監禁されてんだか、息の詰まる生活だろうな。ひとりでお出かけなんてまずありえない。どうりで真夜中限定で出て来るわけだ。さて。じゃ。参ります」

飛夏「む？」

ネコ吉、大きく息を吸う。

ネコ吉、大声で呪文のようなものを唱えはじめる。

ぎよっとする飛夏。

いい加減ででたらめな文言。

すぐに若い衆が集まってくる。

若者1「なんだなんだ、なんの騒ぎだ！」

若者2「てめえ、店の前でなに叫んでやがる！」

ネコ吉「うおおーっ！ 恐ろしや！ この家には

狐がついておる！ 具体的には、娘にっ！」

若者1「何者だ！」

ネコ吉「私は全国行脚をしているめっぼう強い陰陽師だ！」

飛夏「そうきたか」

ネコ吉「この娘に会いたい。娘が危険じゃ！」

若者1「なんだ、この怪しいヤツ！」

若者2「どっかに連れてけ！」

おう、と若い衆がネコ吉を取り囲む。

飛夏「そうなるだろうな」

ネコ吉「狐の呪いじゃあああーっ！」

主人の声「待ちなさあああーいっ！」

ハツとする飛夏。

店の方を見る若い衆たち。

店の主人が店から出てくる。

主人は若い衆をかきわけ、ネコ吉の前に。

主人「さぞやご高名なお方とお見受けしました。

ここではアレですので、さ、こちらへ！」

主人はそそくさとネコ吉を店に通す。

飛夏、あ然。信じられない。

ネコ吉、飛夏に舌を出して見せる。

○同・廊下

主人に導かれ、奥へ進むネコ吉と飛夏。

小声で話す。

飛夏「毎度、毎度、お前のバカげた嘘がまかり通

るのが私には不思議でならない」

ネコ吉「そうか？」

飛夏「そうだ」

ネコ吉「あつちも心当たりがあるから鵜呑みにで

きるんだろ」

飛夏「私なら絶対ひっかからない」

ネコ吉「ホントか？」

飛夏「ありえない」

ネコ吉「あ。そういや、紅雲が言ってたけど、上

様の……、いや、今はやめとこ。こつちに集中」

飛夏「なんだ？ 言いかけてやめるな」

ネコ吉「あとでな」

飛夏「いま言え！ 上様がどうした！」

ネコ吉「大声出すなよ。だから、なんかな、水戸

のヤツが脱藩して將軍暗殺、企ててるって」

飛夏「なにっ！」

ネコ吉「はい、ひっかかった」

飛夏「……お、お前っ！ 今のはシヤレにならな

いやツだぞ！」

ネコ吉「ほらな。ひっかかる魚はひっかかる。正

しいエサさえ選べばね」

飛夏「この、嘘つき！」

ネコ吉「だましましたまされ味噌も髑髏に早変わり。

人には想像力がある。それって、楽しいよな」

主人、奥の一室の前で立ち止まる。

主人「ここでございます」

○同・つゆの部屋

昼なのに暗い、閉めきられた一室。
ネコ吉がふすまを開ける。
部屋の中に光がさし込む。
そっと部屋をのぞくネコ吉。
散らかった部屋はしんと静まり、人の姿はない。

ネコ吉「もしもし」

部屋に入るネコ吉。

ぱきっ、と、何かを踏み壊すネコ吉。

見ると、足元には引き裂かれてバラバラになった人形が。

ネコ吉「げっ」

突然、ワン！ と、犬が吠える。

ネコ吉は、びくつとする。

ネコ吉の横で、小型犬が咬み壊した人形をくわえて尻尾を振っている。

ネコ吉「お、おい、わんこ！ おどかすな！ びっくりし……、どわっ！」

ネコ吉は飛びのく。

散らかしっぱなしの着物の山に埋もれて顔だけ出ているつゆがいる。生気がない。

つゆ「どこのどなたが存じませんが、お帰りください。これは恋の煩い。お医者さまにも治せません。ああ、死にたい」

飛夏「思った以上に重症だな」

○同・店先

つゆの手をひっぱって店から出てくるネコ吉。

つゆ「いや、いやです！ はなしてください！」

続いて、飛夏と主人も出てくる。

つゆ「狐なんて憑いてませんっ！」

つゆは抵抗するがネコ吉ははなさない。

主人「どうか、娘をよろしくお願いいたします！」

ネコ吉に頭を下げる店主。

つゆ「お父さま！ これは間違いです！」

ネコ吉「これより、狐を稲荷に返してくる。なんびとたりともついてくるな。邪の者と戦う術の

ない者がへたに近づけば荒ぶる狐に魂を喰われるぞ！ おそろしやあ！」

つゆ「助けて！ みんな！ 佐助！ 栄吉！」

わらわらと若い衆が集まってくる。

若者1「お嬢さま！」

若者2「お嬢さま！」

主人「いいのだ、かまうな！」

若者1「しかし、旦那さま！」

若者2「お嬢さまひとり誰とも知れぬ男と行かせるわけには！」

ネコ吉「その心配ももつとも。私が信用できないなら、こいつを代わりに置いていく！」

ネコ吉、バシン、と飛夏の肩をたたく。

飛夏「む？」

ネコ吉「私のかわいい愛弟子を！」

若い衆、飛夏を見て、態度が豹変。

若者1・2「いってらっしゃいませ、お嬢さま！」

つゆ「お前たちっ！」

ネコ吉、飛夏にほほ笑む。

ネコ吉「あとはよろしく」

飛夏「なにをだ」

ネコ吉「もろもろ」

わらわらと飛夏を取り囲む若い衆。

若者1「巫女さん、お茶はいかがですか！ うま

い菓子もありますよ！」

若者2「巫女さん、長旅疲れたでしょう、肩をお揉みしましょうか！」

○稲荷神社・境内

つゆの手を引いてくるネコ吉。

つゆ「はなして！ 狐なんて憑いてません！」

ネコ吉「わかつてるよ」

つゆ「え？」

ネコ吉「おーい！」

稲荷の後ろから九郎衛門が出てくる。

つゆ「九郎衛門さま？ なぜここに？ この方は、いったい？」

九郎衛門「つゆ、察しの通り。この方は陰陽師ではない。……死神だ！」

つゆ「はい？」

ネコ吉「話せば長い。それより、九郎衛門」

九郎衛門、うなづく。

九郎衛門「つゆ、落ち着いて聞いてほしい。新三郎の居場所がわかった」

ハツとするつゆ。

九郎衛門「新三郎に会いたいのか？」

つゆ「……！」

つゆ、九郎衛門にすがりつく。

つゆ「会いたい」

つゆ、涙をためる。

つゆ「会いたい！ 会いたいっ！ 今すぐ連れて行ってください、九郎衛門さま！」

九郎衛門は切なく、笑顔を作る。

九郎衛門「行こう」

ネコ吉「……」

○武家屋敷・外

古い武家屋敷。決して裕福ではない。

垣根越しに庭をのぞくネコ吉、九郎衛門、

つゆ。

ハツとするつゆ。

つゆ「新三郎さま！」

庭で刀を振って鍛錬する前野が見える。

なるほど、女が惚れるようないい男。

九郎衛門「つゆ……」

ネコ吉「あいつの名は前野新三郎じゃない。本当

の名前は黒崎丈之助」

つゆ「黒崎、丈之助？」

九郎衛門「ここは黒崎という家だ。由緒正しい家柄だけど、今はすっかり没落して……」

子供の声「父上えー」

ハツとして庭を見るつゆ。

無邪気に前野にかけよる幼い子供。

前野が子供を抱き上げる。

つゆ「あ」

おなかの大きな女が縁側に出てきて座る。

女と子供に笑顔をむける前野。

つゆ、口を押える。

そこには幸せそうな家族がいる。

前野は心から笑っている。

飛夏「あいつ、妻子がいたのか！」

いつのまにかネコ吉の隣にいる飛夏。

ネコ吉「飛夏、いつのまに」

飛夏「もう許せない！」

つゆ、後ずさる。

九郎衛門「つゆ？」

前野がこちらに気づく。

前野、顔面蒼白になる。

つゆ、なにかつぶやく。

ネコ吉「？」

飛夏「この最低野郎、成敗してやる！」

つゆ、逃げるように走り去る。

九郎衛門「つゆ！」

つゆを追いかける九郎衛門。

ネコ吉、飛夏の手を取ってそれを追う。

飛夏「邪魔するな！」

ネコ吉「いいから！」

立ち尽くす前野。

子供「父上？」

○川・橋の上

走るつゆ。

九郎衛門に追いつかれそうになり、

つゆ「来ないで！」

立ち止まる。

懐刀を取り出すつゆ。

九郎衛門「つゆ！」

九郎衛門も立ち止まり、それ以上つゆに

近づけない。

つゆ「来ないで、お願い。もう……、死なせて！」

つゆは懐刀を自分の喉元につきつける。

九郎衛門「やめろ！」

つゆ「さよなら、新三郎さま。さよなら、九郎衛

門さま。なにもかも、これで終わりです！」

つゆはぎゅっと目をつぶる。

九郎衛門「よせーっ！」

ネコ吉「ちよおとおおおーっと待てコラあ！」

つゆにボディータックルを決めるネコ吉。

つゆ「きゃっ！」

ネコ吉とつゆ、もろとも川に落ちる。

九郎衛門「つゆっ！」

飛夏「あのバカ！」

橋から川をのぞく九郎衛門と飛夏。

下でバシヤバシヤやってるネコ吉とつゆ。

川の水位は腰から胸の高さほど。

ネコ吉はつゆから懐刀を取り上げ、遠くに放り投げる。

つゆ「なにをなさるのですか！」

ネコ吉「死んでどうする！」

つゆ「私は愛されてなかった！ はじめから全部嘘だった！ こんなにつらい思いするくらいなら、死なせて！ これ以上、生きてたって意味なんか！」

ネコ吉「恋の傷ならいつかは癒える！」

ハッとするつゆ。

ネコ吉「これで終わりだって思っても、まだまだ続くのが人生なんだよ！ この先、何があるかなんて誰にもわかんねえ！ 勝手に想像して絶望してんじゃねえ！ そりゃ、悪いことだつてある、でもいいことだつてあるはずだ！ せっかくある命、捨てるなんてもつたいねえ！」

飛夏「ネコ吉……！」

ネコ吉「あんたの傷なら、ちゃんとおてんとさんが治してくれる。きれいに治る。だから心配すんな」

九郎衛門「死神……」

ネコ吉「いいか、つゆさん。あんたは幸せになる。

これはもう絶対確定なんだよ」

ぽろぽろと涙をこぼすつゆ。

つゆ「……あなたは、誰なの？ なぜ、私を助けてくださるのですか？」

ネコ吉「オレは、ネコ吉。わけあって、あんたを助ける。バッドエンドは許さねえ！」

○江戸城・中奥（夜）

どどん、と太鼓の音。

金銀砂子のきらびやかなふすまが開く。

そこにいるのは白い寝間着姿の吉宗。

山那・朝霧・本院藏「上様、ご機嫌うるわしゅう」

深々と頭を下げる三人を素通りし、吉宗

はネコ吉の前に来る。

吉宗「待ちわびたぞ、ネコ吉」

吉宗の前に正座しているネコ吉。
堂々としている。

吉宗「ふん」

吉宗、微笑し、ひれふしたままの山那の
背にドカッと腰をおろす。

山那「うごっ」

吉宗は長い足を組む。

吉宗「で。マヌケな幽霊女はどうなった。話せ」

ネコ吉、ものおじせず話し出す。

ネコ吉「とある長屋。夜になると現れる幽霊女。
うらめしやと戸を叩き、中の男をおどかすも、
目当ての男はすでに引越し、部屋には別の男
が住んでいた。ひよんなことから出会ってしま
った幽霊女と若侍。ある日、男の部屋にどこか
らともなく一匹の迷いネコがあらわれた」

吉宗は眉をぴくっと動かす。

吉宗「迷いネコ、とな？」

○（イメージ）十兵衛長屋・九郎衛門の部屋

布団で目が覚める九郎衛門。

九郎衛門の腹の上にネコが座っている。

九郎衛門、目をこすってネコを見る。

ネコがにやあと鳴く。

ネコ吉の声「男は腹をすかしたネコに一杯のねこ
まんまをふるまった」

○元の江戸城・中奥（夜）

ネコ吉「この若侍、ここ最近じゃ珍しいくらいのお人よし。ちよつと目え離れたすきに、すっかりあの幽霊女に惚れちまってた。つてのは、あの幽霊女、実は、幽霊に見えるだけでまだ生身。うらめしや、新三郎さま、なあんて、前に住んでた新三郎って侍にふられてからおかしくなっちゃいた。娘は、新三郎ってやつに心底惚れた。そいつは名家のお侍だったが、今は落ちぶれ、人にはいえない貧乏暮らし。妻子のある身でありながら、別の名かたって金目の女をひつ

かけちゃあ、金をむしり取るひも三昧の外道になりはてていた。住んでた長屋も女と逢引するためだけの仮住まい。あの幽霊娘もこいつにたぶらかされたクチだった。実家が大店の金持ちだけに目えつけられたってわけだ。男にとっちゃただの金づる、それでも娘にとっちゃ初恋だった」

話を聞いている吉宗。

ネコ吉「男の浮気に気づいた娘がへそ曲げてくつてかかると、男はめんどくせえってばかりに長屋まで引き上げちまって、はいサヨナラ。すつぱり手を切りやがった。娘は男への想いを断ち切れず、毎晩、恋しい、うらめしいって、もうそこにはいねえ男にむかって長屋の戸を叩き続けてたってわけ」

山那、朝霧、本院蔵も聞き入っている。

ネコ吉「その人なら引つ越しました。なんて、娘にとつちや寝耳に水。若侍に言われて娘はその場でわんわん泣き出した。この若侍、迷い込んできたネコにまんま食わすくらいのお人よし。とたんに娘が不憫になっちまった。若侍は娘の話し相手をかけて出た。箱入り娘が家から抜け出せるのは店の者が寝静まった夜中だけ。若侍と幽霊娘、失恋話を聞く聞かせるの二人は、毎晩、毎晩、眠らずにおしゃべりを続けた」

吉宗「ふむ……」

ネコ吉「若侍は新三郎を探したが、そんな男はどこにもいない。そりゃ、本当の名は別にある。嘘の名で見つかるわけもない。娘を新三郎に会わせてちゃんと別れさせてやりたい、そうすれば娘は立ち直るはず。若侍はそう思っていた。惚れた娘の笑う顔が見たかったんだ。あのねこまんまはうまかった。迷いネコはお江戸八百八町をかけずりまわって新三郎をみつけ出し、若侍と娘をそいつのもとまで連れてった」

吉宗「ほお？」

ネコ吉「物陰から久しぶりに見た新三郎は、惚れたあの日と同じ、たいした美丈夫だった。娘は胸が熱くなる。でも、新三郎の隣には妻と子供。見たことないようないい笑顔で家族に笑いか

ける新三郎に、娘は全てを悟った。惚れた男にははじめから愛すべき他の女がいたことを。男の心の中には娘の居場所なんてこれっぽっちもありはしなかった。渡した金だっけと家族のために使ってたんだらう。打ちのめされた娘は懐に隠し持った小刀を自分のどの元に突きつけた。若侍の制止も聞かず、もう死んですべて終わりにしたい、と刃を持つ手に力を込めた。ひと思いにのどをつこうってまさにそのとき、ネコが娘に飛びかかった」

黙って聞いている吉宗。

ネコ吉「娘は小刀を落とすし、あわやのところでもバカなマネはせずにすんだ。手痛い恋だった。それでも、恋の傷はいつか癒える。新三郎への想いにケリをつけ、娘はまた歩き出すことができらるだろう。若侍が娘の笑顔を見れる日もそう遠くない。きつと明日にでも、笑ってくれるはず」

ネコ吉、話し終わる。

吉宗に座られている山那、朝霧と本院蔵、黙っている。

吉宗「……ふむ」

長い足を組みかえる吉宗。

吉宗「でっ？」

ハツとする山那、朝霧、本院蔵。視線を交わし合い、うろたえる。

ネコ吉「でっ！」

ネコ吉は待ってましたと答える。

吉宗「続きがあるのだな」
にっとする吉宗。

ネコ吉「もつちろん！」

○（回想）川・橋の下

川からつゆを引き上げる九郎衛門。

九郎衛門「つゆ！ つゆっ！」

つゆを力強く抱きしめる。

つゆ「……く、九郎衛門さま？」

飛夏の手を借りてネコ吉も川からあがる。

九郎衛門「ああ！ 本当に死んでしまうかと思っ
た！」

つゆ、抱きしめられて困惑している。

九郎衛門「新三郎を探したのは、つゆに元気になってほしかったからだ。この恋にケリをつけて、前を向いてほしかった。つゆに笑顔が戻るなら、どんなことだってする。オレは、つゆ……」

九郎衛門、つゆをぎゅうつと抱きしめる。

九郎衛門「お前が好きだから」

つゆ「……！」

つゆ、九郎衛門の腕をたたく。

つゆ「く、苦しい、九郎衛門さま」

ハッとする九郎衛門、つゆをはなす。

九郎衛門「ごめん」

つゆ「……」

つゆ、うつむく。

どう答えていいかわからないつゆと、他に続ける言葉もなく黙る九郎衛門。

ふたりの様子を見ているネコ吉と飛夏。

黙りこくる二人のむこうをゆったりと船が通り過ぎる。

飛夏、ネコ吉を見る。

飛夏「日が暮れるぞ」

ネコ吉、ぽりぽりと頭をかく。

ネコ吉「ちよつとごめん。九郎衛門がここまで言ってるんだから、なんか言っちゃれよ、つゆさん」

つゆ「……私は、なんて、答えたらいいのかわかんないのか」

ネコ吉「自分の気持ちかわかんない？」

つゆ「私は、新三郎さまを……」

九郎衛門「……」

ネコ吉、ため息。

ネコ吉「野暮を承知で言わしてもらうぜ。さっきさ、あんたは前野に飛びかかって刃物でぶっ刺してやってもよかったのに、しなかったよな」

つゆ「そんなことしません！」

ネコ吉「こいつはしそうな勢いだっただけど」

ネコ吉、隣の飛夏を指さす。

飛夏「お前が邪魔した」

ネコ吉「ともあれ。あんた、逃げ出す前にちっちゃい声で言ったろ。『お幸せに』って」

ハッとする九郎衛門。

つゆ「……」

ネコ吉「今でもあいつに未練があんなら、そんな

かわいいセリフは出てこねえ。同じところぐるぐる回ってるヤツはすっぱり身を引いたりしねえんだよ。あんたの傷は、もしかしたら、もう癒えてんじゃないの？」

ハッとするとつゆ。

ネコ吉「別の恋に落ちてない？」

つゆ「……」

つゆ、九郎衛門を見る。

つゆを見ている九郎衛門。

ネコ吉「それが、今のあんたの気持ちだろ」

見つめ合う二人。

つゆ「九郎衛門さま」

九郎衛門「つゆ」

○元の江戸城・中奥（夜）

ネコ吉「そのとき、にやあとネコが鳴き、若侍はひらめいた。毎夜毎夜の夜更かしていい加減やつれた男と幽霊娘。せつかく怪談風に仕上がってる二人の見てくれ、ムダにする手はない！」

○（回想）町かど・小道（夜）

ひと気のない夜道。

ほろ酔いで行く前野。

前野「うつく。呑みすぎたか。……うつ！ くさ！
なんだこの匂い！ くっさ！」

せまい道の真ん中で、下肥問屋に扮したネコ吉が肥をどっちやりこぼして立ち往生している。肥とは人の糞尿。

ネコ吉「あ、こりや、お侍さま。申し訳ねえ。見での通り、肥をひっくり返しちまった。他の道を回ってくださいやし。申し訳ねえでやんす」
足元はびちゃびちゃ。

前野は飛びのき、舌打ちする。

前野「バカ野郎、気をつけろ！」

道を曲がっていく前野を見送るネコ吉。
にっと笑う。

○（回想）墓場（夜）

草の茂る墓場の中を行く前野。
暗く、不気味な墓場。

前野「クソ、とんだ回り道を」

柳が風に揺れ、月が雲に隠れる。

あたりは暗闇に。

足元が見えずつまづく前野。

前野「……く、つたく！」

前野、手提灯を取りだし、灯をともす。

薄明りで歩き出す前野。

ひた、ひた、と後ろから足音がする。

ふりむく前野。

後ろには誰もいない。

前野「……」

気を取り直して歩き出す前野。

ひた、ひた、と足音。

前野「！」

ふりむく前野。

手提灯で照らす、誰もいない。

前野「……空耳か」

前野、そう言い聞かせ、歩きだす。

ひた、ひた、と足音。

前野、怯え、ふりむく。

前野「誰だ！ 誰かそこにいるのか！ 悪い冗談

はよせ！」

風が吹き、ざあつと草木が鳴る。

逃げ出そうと前を向く前野。

前野「ひっ！」

前野、青ざめ、自分の手元を見る。

背後からのびた青白いやせた手が、手提

灯を持つ前野の手首をつかんでいる。

前野「ひええええっ！」

悲鳴をあげて手提灯を放る前野。

飛びのいてふりむくと、そこには髪がぼ

ざぼさに乱れて顔が見えない女がいる。

着物も破れ、汚れ、乱れている。

前野「あつ、あひ、あひあああつ！」

にやりと笑う女の口元。口の中が真っ赤。

前野はぎょえーっと悲鳴をあげて逃げる。

全力で走る前野。

女が追いかけてくる。

前野は全力で走るが、女も猛烈に速い。

墓場の直線を猛ダッシュする二人。

前野「は、はは、速い速い速い、速いっ！」
涙目の前野。

風をうけてお化け女の前髪がわかれる。
あらわれた顔は九郎衛門。前野を追いかけるお化け女は九郎衛門の扮装。
草むらに身を隠している飛夏。
前野が来たところで足元のひもを引っぱる。

ひもにつまづく前野。

前野「ぶわっ！ だっ、どわーっ！」

前野、派手にこける。

しゅるしゅるとひもを回収する飛夏。

前野、あわてて後ろを確認。

と、誰もいない。

前野「……な、なんだ！」

息が上がっている前野。

前野「くそっ、はあ、はあ、なんなんだ！ ん？」

前野の前方にひとりの娘がたたずんでいる。前野に背を向けたままの娘。身なりはよい。

前野「……？」

ゆっくりふりかえる娘。

つゆ「……新、三、郎、さま……」

それはつゆ。頭から足まで体の前面が真っ赤に血に染まっている。

前野は絶叫。

ゆっくりと前野の方に歩いてくるつゆ。

前野「つつつ、つつ、つゆ！ まさか！ 死んだのか、お前っ！」

前野は腰が抜けて立ち上がることもできず、あとずさる。

つゆ「……新、三、郎、さま……」

前野は泣いて謝る。

前野「ああ！ つゆ！ 許してくれ、オレが悪かった！ すまない！ 頼むから許してくれ、この通りだ！ 許せ、つゆ！」

土下座する前野。

前野の前に立っているつゆ。

つゆ「許します！」

前野「……へっ？」

前野はあつけにとられてつゆを見る。
つゆはしゃがみ、前野の頬に触れる。

つゆ「許します、新三郎さま。どうかお幸せに」
優しくほほ笑むつゆ。

前野「つゆ……」

前野はばたりと気絶する。

○（回想）大通り（夜）

丸い月が出ている。

人のいない明るい夜道。

ネコ吉、飛夏、九郎衛門とつゆの笑う声がする。

帰り道に行く四人。

ネコ吉「オレも見たかったな、あいつの土下座！」

飛夏「腐っても武門の出、見事な土下座だった」

つゆ「そんな、いじわるを言って」

ネコ吉「これでスッキリしたな？」

つゆ「はい！ とっても！」

九郎衛門「死神」

ネコ吉「ん？」

九郎衛門「オレ、侍やめます」

ネコ吉「えっ？」

九郎衛門「考えたんです。このまま仕官先のない浪人をして生きていくか、それとも……。オレ、侍の身分を捨てて町人になります。いちから働いて商売覚えて、つゆに見合った男になる！」

つゆ「九郎衛門さま……？」

つゆに向き合う九郎衛門。

九郎衛門「つゆ。これからは、オレがつゆを幸せにする。オレの全人生をかけて、つゆの一生をハッピーエンドにする。だから……」

黙って見ているネコ吉と飛夏。

つゆ「九郎衛門さま……」

つゆ、涙ぐむ。

九郎衛門「だから……」

つゆ「はい！」

九郎衛門「まだ言っていない」

つゆ「はい！ 九郎衛門さまっ！」

九郎衛門に抱きつくつゆ。

九郎衛門「つゆ」

九郎衛門、つゆを抱きとめる。

九郎衛門「オレと、一緒になってほしい」

つゆ「一生、おそばにおいてください」

つゆは九郎衛門に笑顔を見せる。

九郎衛門、ほっとして、うれしくて、つ

ゆに笑顔を返す。

飛夏、やれやれとネコ吉を見る。

ネコ吉も飛夏を見る。

二人をひやかすように眉をあげるネコ吉。

九郎衛門「ありがとう、死神」

ネコ吉「死神じゃねえよ」

九郎衛門「ネコ吉」

ネコ吉「ああ！」

九郎衛門とつゆは深々とお辞儀をして、

歩いて行く。

それを見送るネコ吉と飛夏。

月に照らされた夜。

九郎衛門がつゆと手をつなぐのが見える。

飛夏「いいのか、ついて行かなくて」

ネコ吉「こつから先は野暮ってもんだろ？」

飛夏「む」

ネコ吉「帰って一杯やろうぜ」

飛夏「オヤジのつけで？」

ネコ吉、にっと笑う。

ネコ吉「オレのどこに金があんだよ？」

ぱん、と大きく手を打つネコ吉。

ネコ吉「幽霊女と若侍の話、これにて一件落着！

めでたし」

○元の江戸城・中奥（夜）

ネコ吉「めでたし！」

吉宗に頭をさげるネコ吉。

山那「……！」

吉宗に座られたまま感動している山那。

朝霧・本院蔵「……！」

朝霧と本院蔵も感無量。二人、思わず拍

手をしだす。

じっとネコ吉を見ている吉宗。

吉宗「ネコ吉」

ネコ吉、顔をあげる。

ネコ吉「はい」

吉宗「あの、にやあにやあうるさい迷いネコはどこへ行った？」

ネコ吉「え？ ネコ？ あのネコは。えっと……」

ネコ吉、かわいこぶって。

ネコ吉「次はあなたのところに現れるかもっ」

吉宗「つまらん！」

ネコ吉「げっ！」

立ち上がる吉宗。

吉宗「山那、あれを持って！」

山那「は、はい！」

吉宗「いつまでうずくまってる！」

山那「はいっ！」

山那、吉宗のゴージャスな刀を持ってきて差し出す。

ネコ吉「ええええええーっ！ 打ち首いーっ？」

刀に手を伸ばす吉宗。

がくがくと震えるネコ吉。

吉宗の手は刀を素通りし、山那の懐から白い小さな包みを取る。

吉宗「どいつもこいつもびーちくばーちくと」

吉宗、それをネコ吉の口に突っ込む。

吉宗「よくしゃべる口だ！」

ネコ吉「あがつ。……ふえ？」

ネコ吉の口から包みが落ちる。

包みがほどけ、ちらりと見える小判十枚。

吉宗「つまらんおとぎで眠くなった。さがれ」

ネコ吉「……」

ネコ吉、ハッとして小判を拾い集める。

山那、朝霧、本院蔵の三人がネコ吉を抱えて去ろうとする。

吉宗「おい、ネコ！」

ネコ吉「はい！」

吉宗「グッジョブ」

ネコ吉「ぐ？」

吉宗「次も楽しみにしているぞ」

ネコ吉「えっ？」

吉宗がダークにほほ笑む。

ネコ吉「次？」

青ざめるネコ吉。

ネコ吉「ええええええええええええええええーっ！」

× × ×

部屋でひとりになる吉宗。

障子を開ける。

そこは中庭。

吉宗「いまの話に嘘はないか」

庭に飛夏が控えている。

飛夏「あります。話に出てきたネコというのは」

吉宗「それ以外は」

飛夏「……他？ 他には、まあ」

吉宗「城下での下級武士の暮らしぶりは人づてに

聞いていた。決してよいものではないと。しか

し、それほどまでか。生活に困り町娘にたかる

輩、身分を捨てても惜しいとも思えぬとは。や

はり問題は米相場……」

考え込む吉宗。

飛夏「お気に召されたのですか、あのバカを」

吉宗「ん？」

飛夏「城下の現状ぐらい、我々御庭番が上様の目

となり耳となり調べつくして参ります」

吉宗「飛夏。我々は紀伊から来た。いわば、よそ

者。江戸のことは江戸の者に聞くが最上」

飛夏「しかし」

吉宗「そうふくれるな。頼りにしている」

吉宗は飛夏の頭をぽんぽんと叩く。

飛夏「む」

吉宗「この城は伏魔殿。魑魅魍魎の巢窟だ。目の

前にいるのは敵か味方か、聞こえる話は嘘か誠

か、やすやすとは区別がつかぬ。それでも執政

者としての務めは果たさねばならぬ。オレがこ

こに来た理由は、民の暮らしをより明るくする、

そのためだけなのだから」

飛夏「上様……」

吉宗「何を信じ、誰を信じる。それぐらい自分勝

手に決めさせてくれ」

かしづく飛夏。

飛夏「御心のままに」

吉宗「飛夏、お前こそ、あいつを気に入ったので

はないか？」

飛夏「まつ、まさか！ ご冗談を！」

吉宗はくっくと笑う。

吉宗「たかが、おとぎ。されど、おとぎ。見ろ。
今宵も月が美しい」

月を見上げる吉宗と飛夏。

○同・三の丸・外（夜）

城から出てくるネコ吉。

とても真顔で。

立ち止まり、

大きく息を吸う。

ネコ吉「あああああああああああーっ！」

絶叫するネコ吉。

ネコ吉、やつと緊張がとけて正気に戻り、

ネコ吉「あつぶねえーっ！ わっ！ うわっ！

こわっ！ 生きてるよな、オレ？ 全っ然、生

きた心地がしねえ！ 地獄の方がここより空

気いいんじゃねえの？ いやああああ、誰か助

けて！ なんで？ なんでオレなの！ 『次も

楽しみにしているぞ』ってなに？ は？ 次？

終わりじゃねえのかよ！ ふにやあああ……」

顔をおおうネコ吉。

ちやり、と小判の音がする。

ネコ吉「……」

ネコ吉、懐から十両を出す。

ネコ吉、見つめる。

ネコ吉「……金だ」

ぴかぴかの小判。

夜空を見上げるネコ吉。

ネコ吉「ぴっかぴかだな！」

きれいな月が輝く。

それを見上げているネコ吉。

りんの笑い声が聞こえる。

りんの声「虎、虎っ」

○（回想） 蟲玄庵の療院・縁側

笑っているりん。

りん「ねえ、もつと聞かせて。虎のお話、もつと、

ずうーっと、聞いてたい！」

○元の同・江戸城。三の丸・外（夜）

月を見上げているネコ吉。

ネコ吉、ほほ笑む。

ネコ吉「……しやあねえな」

小判を懐にしまい、両頬をばちんと叩くネコ吉。

ネコ吉「よっし、次のネタでも探すかっ！」

気合十分、歩き出すネコ吉。

(おわり)